優美
有益
多趣

女子のとも

毎月二回 **定價**●一冊金拾錢●六冊金五拾七錢●十二冊金壹圓拾錢●二十四冊金貳圓拾錢●無税送料●郵券代用一割増但五厘若は壹錢切手限

第二十號四月十七日**發刊**各號欠本なし**每號**鮮麗なる**口繪**古今**筆蹟數葉を添ふ**●

女子教育家庭教育第一の機關●當世名家の論說講義歌文を滿載し女子必修の事項を網羅す

●**記事**女子之友●家庭●史談●學藝●小說●漫錄●文園●雜報の八欄に分ち家庭欄内には附後古川學士の救急談を加へ文園欄内の兼題は常に阪正臣先生の懇篤なる添削を乞へり

其他每號附錄講義を添へ元良文學博士の小兒心理學講義あり池邊義象先生の國文講義あり後閑菊野子先生の家事衛生講義あり

時方に好春此時に當り大に誌面を改良し記事を精選し百花爛熳として鳥音を弄するの趣あらしめんとす請ふ世の令孃貴媛若くは女子教育家庭教育に志ある諸士は奮つて本誌愛讀の榮を賜はらん事を

第二十一號には來る六月二十一日發刊本誌一周年祝の懸賞歌文募集廣告を載す

發行所 東京本郷元町二丁目三番地 **東洋社**

東京裁縫女學校長渡邊辰五郎著

裁縫教授書

全部定價金一圓 郵税八錢 取次販賣 **女學雜誌社**

東京堂
東京日本橋區[illegible]
女學雜誌一手賣捌

優美 有益 多趣

女子のとも

第二十號 四月十七日 **發刊** 各號欠本なし **毎號** 鮮麗なる **口繪** 古今 **筆蹟數葉を添ふ**●

記事 女子教育家庭教育第一の機關●當世名家の論説講義歌文を滿載し女子必修の事項を網羅す 女子之友●家庭●史談●學藝●小説●漫錄●文園●雜報の八欄に分ち家庭欄内には爾後古川醫學士の救急談を加へ文園欄内の兼題は常に阪正臣先生の懇篤なる添削を乞へり

其他毎號附錄講義を添へ 元良文學博士の小兒心理學講義あり池邊義象先生の國文講義あり後閑菊野子先生の家事衞生講義あり

時方に好春此時に當り大に誌面を改良し記事を精選し百花爛熳として禽鳥音を弄するの趣あらしめんとす請ふ世の令孃貴媛若くは女子教育家庭教育に志ある諸士は奮つて本誌愛讀の榮を賜はらん事を

第二十一號には來る六月二十一日發刊本誌一周年祝の懸賞歌文募集廣告を載す

毎月二回 **定價**●一冊金拾錢●六冊金五拾七錢●十二冊金壹圓拾錢●二十四冊金貳圓拾錢●無減送料●郵券代用一割増但五厘若は壹錢切手限

發行所 東京本郷元町二丁目三番地 **東洋社**

東京裁縫女學校長渡邊辰五郎著

裁縫教授書

全部定價金一圓 郵稅八錢

取次販賣 **女學雜誌社**

女學雜誌一手賣捌 東京神田區表神保町 **東京堂**

社會學社會問題及社會政策之評論

日本宗教合併

社會雜誌

第十二號要目

(定價一冊十錢郵稅一錢半年分六十五錢)

●社會研究の方法奈何
年齢に對照したる男女の割合●職業及任務の事 呉文聰
●社會學一斑
社會進化論●自然陶汰と社會の變遷 高木正義
●社會政策の方針
個人主義●社會主義●社會改良主義●政府の注意
すべき件々●民間有志の注意すべき件々●寺院敎
會其他の注意すべき件々 山形東根
●凶荒の說
凶荒の措置 藤井米八郎
●獨逸國勞働者疾病保險法
●乞兒惡化の狀況
乞兒となる者の種類●乞兒の變化●乞兒進んで
「ポタハヅキ」及「カッパライ」となる●「ポタハヅ
キ」進んで掏摸に化するの狀況●掏摸の狀況●乞
兒立ン坊となる●「カッパライ」竊盜に化する狀況
●舊幕政下の乞丐と聖代の乞丐 安達憲忠

●職工の誘拐と其取締法
●外交問題の趨勢
(一)勝伯●大隈伯●伊藤總理●板垣伯●山縣將軍
●青木子●曾根法相等の外交意見
(二)對外同志會●青年急進黨●懇話、三曜兩會
對外同志記者會●自由黨等の對外意見及決議●
●歐米の工業及勞働者の比較
●阪地勞働者生活の狀況
●淸國紡績業の職工と賃銀
東京の宗教界(其一) 希聲
東京の敎育に就て 石川惟安
春夜閑談 得一居士
一面暴利他面慈善●人の感化●生活問題●宗敎
界の振興●社會上の優勝劣敗●餘裕を造れ●前
途奈何
●每月一回發行●爲替振込は麴町局とす

發賣所 東京麴町區下六番町六番地 社會雜誌發賣所

●論理的觀察●科學的研究●敎科用●解剖明晰●講習用●

露堂 大內青巒 序

●鴨長明撰

復軒 烏居忱 解

方丈記析義

●敎育的見解●文學的興味●參考用●評語陳新●獨習用●

大賣捌京橋北隆館

正價金廿五錢
郵稅金四錢

●●發行所●●
●大日本圖書株式會社●

大賣捌神田有斐閣

東京市京橋區銀座壹丁目

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百六拾四號

明治三十一年四月二十五日發兌

社説

誠實即卓識

卓然たる識見は俊傑の獨り有する所、尋常の人の容易く企及するを能はざるもの也。

但だ夫れ、尋常の人何ぞ能く卓識の効を奏するとなきにあらず。是れ、拔爾超脱の識量ありてに由らず。但だ其の誠實なるに由る。誠實の士は眩せず、此を以て明らかなり。誠實の士は爲にするとなし。此を以て其の本領を失なはず。心、眞面目にして、事物の眞面目を觀る、一時の外形に迷はずして、十年の堅固に期圖すれば、所行自づから興に乘るの流行に似ず、飜へつて其の跡を吟味すれば、首尾相通し、終始一貫して、朗然として精神を顯昭す。此に於てか、人則はち卓識と稱す。蓋し、卓識たらざるにあらず、而も之を誠實の故と言ひて寧ろ其の穩當なるを見る。

古語に曰く、人事盛んにして人、天に勝ち、人事定まつて天、人に勝つと。人事盛んなるとは、流行の謂ひ也。人もし、暫らく。流行に見て、一時の假相を眞なりとせば、嚴たる天道の大義は、空しき形容詞に過ぎざるが如けん。所云る、人、天に勝つの時なり。久しうして、時勢一轉し、流行、其の影を散らし、人事其の本色に定まるの時に及べば、茲に初めて古訓經典の文字燦然として、其意義煥發し、先聖の垂示は正に人情の極致にして、世事の眞相此の外にある可らざるを覺了す。則はち是れ、天、人に勝つの時也。彼の聖人は自からにして之を識る。賢者は極めて之を識る。俊傑は看破して之を識る。但だ彼の尋常者の能く此等偉人の形跡に同ずるとある所以のものは、其心、誠實なれば也。誠實即卓識とは此の謂ひ也。

天地に理あり、理は直なり。心、誠實にして其の直路に伴ふ

に非ざれば、此の理を洞見すると能はず。宇宙に神あり、神は正なり。心、誠實にして潔白、其の正しきに同化するに非ざれば、此の神を渇仰すると能はず。事業は衆心を維ぎ、衆力を合せ、衆望に副ふによりて成就す。誠實にあらずして、奈何んぞ能く之に適はん。人は、語らざれば、其意を通ずるに難し、交接せざれば、其の情を調ふるに難し、相助くるにあらざれば、大事成らず、凡そ人々相結ぶの關鎖は、只だ誠實よく之を堅牢にす。方今の憂ひは、不景氣にあらず、人心の萎靡にあり、人心の萎靡は即はち不誠實の致す所のみ。事業の不振、挫折を徒らに歎ずる勿れ、只だ不誠實の致す所のみ。餘算の狂ひ、見込の違ひ、計畫の齟齬をのみ咎むる勿れ、其の根源は多くは不誠實の致す所のみ。吾人が今にして尤も痛憂する所のものは即はち只此に存す。

因りて惟ふ、方今の逆境は、人事の虛榮を剝脫して、其の眞面目を露白し、一代の流行を赤裸にして其の結局を示し、以て輕薄と、闘鹵と、惰弱との結ぶ所の果を味はしむるとを爲す。其の苦味は乃はち當然の敎訓なり。世人今にして大いに誠實の德を悟り、質素朴直の道を贊せんとす、これ一大所得眞正の幸福に非ずや。將來の質實懷ふべき也。果して然らは、奈何んぞ今の逆境を呪はん。寧ろ感謝して其垂示を聞き、猛然として興起奮發を決すべき也。

逆風孤叫

◎エルサレムの娘等よ、我が爲めに泣く莫れ、汝等自身と其の子孫の爲に泣けよ』とは、今に方りて切りに支那帝國の爲めに杞憂を抱く人々に言ふべきとである。ナニ、膠洲灣の借用、旅順港の借用、威海衛の借用と、たゞお隣の頭痛を疝氣に病んで慷慨するは、御苦勞千万の事である。支那の國躰は日本と違つて、万系一統を名譽にしては居らぬ。天下は天下の天下にして、所云る王者が世を治むれば夫で善いのである。あの廣い國の地面を他國に貸したるとて、何も不思議はない。元來、今の清國皇帝は、漢人種の爲には、異國人である。今更ら、旅順港位に驚ろく程ならば、早くから今の皇帝に謀叛した筈である。況んや、西洋人が何處を借りやうとも、之が爲め

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に得をするものは、ツマリ支那人である。パッパと金を遣はせて、其の利益を收むるは、支那人の長所で、今日の臺灣を見ても直きに其工合は分る筈である。然るに、今に至つても尚ほ支那人を了解せず、余計の御心配をして只だお向ふの爲めに斗り歎息するなどは無用至極の沙汰である。近頃の演説會で、某が慷慨して演説した言葉に「支那は東洋の玄關の如くである、今ま既に之に火が付て居る、障子一枚コナタに居る日本人が安心して居られやうか」と言つた。スルト、聽衆も熱心に喝采したが、吾輩は、隨分、妙な所に意氣込む人が多いとただ少し變に思ふた。

◎外交の事をシキリと演説して、國民の輿論を後楯にすると云ふは、聞えたやうで、實は譯の分らぬ話だ。此の種の論者は直きに西洋の例を引いて、西洋では各國夫々外交の輿論大方針がきまつて居ると言はるゝが、夫は外交が緻密で自然と定まるので、何も演説できまるのではあるまい。商賣の關係を第一として、夫から心易くもなり、離婚もするし、互ひに學問に往來もして、自づと關係が緻密になり、人氣が寄り、流行が定まつて、ソコデ國民の間に何處と何處とは同盟する

と云ふやうな工合に自然と定まるのである。元來、演説位の理窟できまるもので無い。偖て、此樣にして同盟の氣風が自然に出來るのは、外交上に好都合かと言ふと、必らずしもソウでない。實は政治家の身に取つては心配の種である。ナゼと言ふに、國民の好む所と、國家眞誠の利益とが一致する時は善いが、或る時は全たく之に反對した同盟を作らなければ成らぬから、實は面倒を生ずるのである。我國の如きは、外交が疎濶で、まだ、何處の國を一番厚くすると云ふ實際のお附合も出來て居らず、其邊一切お構ひなしだから、各國に對して同樣の愛嬌を呈し、同等の好誼を呈することが出來る。政治家に取ては、眞に好都合の場合だ。然るをワザ〱西洋の面倒くさい煩ひのまねをして、益もないに、國民の好みを偏らせ、平地に波瀾を起すやうなスキキラヒをさせて、何處に同盟しろ、何處に敵させなどと演説して聞かすとは、どう云ふ御主意であるのか、吾輩には頓と分からぬ。

◎民をして依らしむるを可とす、知らしむるを不可とすと言はれたは、サスが聖人の活眼で、又、其の慈悲深い所である政治の事を八釜しく言ふのは、國家の吉兆ではない、實は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遊民が多くて、眞面目に其の職業を力めぬからの事だが、扨て、其やうに八釜しやが殖た元因を正して見ると、元來、政治と云ふもの丶眞相を辨へぬから起つたとである。ツマリは、西洋の立憲政躰を書物で讀んで、政治の器關を飜譯流に我國に輸入しやうとした誤りから來たとと思はれる。一躰、政治と云ふものは、平生は一つの事務に過ない。方針も何もあつたもので無い。國民自治自活の仕事から起つて來る事務の帳付をしたり、公證をしたり、其の衝突の勸解をしたり、其の約束や規律を破つたものを責めたり、其の共同一致で爲る仕事の管理をする位の事で、申さば、政治とは俗務で、役人は本來、俗吏が善いのである。夫で、役人に敏腕家を求めるのは宜しくない、たゞ誠實の人を第一とする。少々のちがひで、仕事が捗取らず、其の月給に冗費が掛るやうに見えても、國家の上から計算すると、役人の月給位ひは少々なものだから、むしろ誠實で、悪いとをさせぬのと、自分の伎倆に誇つて、いろ／＼の仕事を仕出かさぬ者が善いのだ。夫れで官吏の刷新だの、人才登庸などと云ふは、未だ政治の夢を見て居るので、大抵、善い加減にして役人の事などは搆はぬが善いのだ。ソコデ、役人の十に九分九厘迄は俗吏にして置くが善い。彼等に議論などをさせると事務が捗取らぬ。そこで、所云る大方針は、大臣とか、總理大臣とかが獨り決するので、夫は政治上の天才でなければ出來ぬ。之は又、大した見識で無ければ出來ぬ。夫故、何時の世でも、政治上の大方針なるものは、大抵、一人二人で決するのである議論などで定まるもので無い。此の中心が定まらぬと世が亂れるか、人心萎靡するか、龍頭蛇尾になるか、所云る政治上の失策が續々として起つて來るのである。

◎政治で浦山しいのは、魯西亞と支那とだ、人民は一切、政治などに頓着しない。眞面目に家業に勉强して居る。夫故、政治家はアノやうな大策を決するとが出來るのだ。之は、必竟、國が大きくて、外交上の關係からピリ／＼するとが少なく、人民も、國家とか何んとか謂ふ神經質が發達しなかつたからの故であらう。浦山しいとだ。德川氏なども、其秘訣を學んで、外交の事は少しも知らせなかつた。藩々の士は、イザ鎌倉と云ふ時に、御馬前に打死をすると云ふ丈けの淡泊な考へで、政論に八釜しくなかつた。夫れで、三百年間に鬼

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に角、長足の進歩をしたが、今日の如き八釜しい時勢となり、而も、其の八釜しくするのを西洋の文明流と考へて、彌よ燒付けるものがあり、ワザ／＼其のやうな教育迄をするのだから、國民はいよ／＼外交論にのぼせて來た。斯樣にのぼせ上つて、只だ連りに當路者の外交策を批評し、甲乙互ひに是として、灌木的外交に奔走する、乃はち喬木的の長命な外交は出來ぬ。そのうちに、露西亞の何十年とかゝる大策は着々効を奏し、支那はいよ／＼繁昌して、追々コチラに出店を開くやうになる。人力車は、チヤン／＼の苦力が曳く。會社は支那人の番頭が實權を握ると云ふやうになれば、日本の外交の名は如何に立派でも、其の實と云ふものは、眞に憫然なとであるまいか。

◎政治に計り、重を置くは、士の餘弊で、民間士人の恥辱であるが、當路者も亦た過ちがある。自から其の地位を榮なりとすればこそ、人が之を爭ふやうになる。人の爭ふのは、ツマリ、其の所有者が見せぶらかす柄である。勳位だの、爵だのと云ふものは、成る丈け、民間人士に呉れて遣るやうにするが善い。所云る北條氏の政道で、自分は從五位下の低い官位をもつて、其の實權を握るやうにすれば、人も爭はず、人氣も平均して、至極、政治を行ふに便利がある。夫に、自分で、天下の名譽を集めるやうにして、民間の政客が八釜しく言ふのを笑ふなどは、抑も人情を知らぬと云はねば成らぬ。老聃先生などは、甘く此邊の機微を穿つて言はれて居る。曰く、人之所レ惡、唯孤寡不穀、而王公以爲レ稱、故或損レ之而益、或益レ之而損。

◎今の逆境に處して何の奇策かあるべき。奇策の奇なるは面白けれども、之に賴つて艱苦を逃れ、手取早く氣樂にならふとする心が即はち惰弱で、此の惰弱な心がある間は、景氣は快復せぬものである。泥水でも何でも冠ぶる、如何なる困苦もする。苦勞は決して厭はないと云ふ大勇猛心の起つた時から、夜は初めてホノ／＼と明け、景氣は次第に善くなるので。まだ／＼今の如き固息策に賴よる間は、景氣挽回の見込は立たぬ。生なかの救濟策は一層毒を深くする計りで、彌よ困苦を長くするのだ。丁度、怠けもの丶改悔する工合を比較して考へれば、直きに分る。其の勇猛心が起らぬ内のナマジの世話は、反つて其の身の墮落を深くするのみだ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

新島襄及福澤諭吉

近代の教育界に、感化を施くことの廣く且つ普かりしこと、新島襄氏と、福澤諭吉氏とに及ぶものは稀なり。一は、精神的に、他は、實業的に、其の感化を發し、殆んど一代の健兒をして、仰いで景慕禁ずると能はざらしめたるは、頗る快心の事とす。

人生、感激の故ありて、壯志奮躍するとを爲すは、何事にても愉快なるが、師弟相追ふの美に至りては、更に一入の壯觀とす。吾人は之を明治聖代の爲に慶す。

凡そ、人をして感激せしむるに堪ふるは、必らずや、血性あり、其の純雜陋雅の如何んを問はず、心、赤誠の欝勃たるものあり、發して禁じがたきの刺激を迸ばしらしむるにあらざるよりは、安くんぞ能く人をして悦服せしめんや。二氏の如きは、たとひ時ありて冷々たり、又たとひ時ありて甚だしき失策ありとも、其の赤情の楚々として人を動かすに足るものなるが故に、則はち能く一代を衝動せり。何ぞ之を偉ならずとせんや。

然りと雖も、眞に偉大なるものは、容易に當世に容れらるゝとなし。たとひ當世已むとを得ず之を容るゝの必要ありとも、當代の輿衆は決して容易く之を賛賞するものにあらず。何となれば、其の識見、時流を抜き、主張、凡俗と異り、殆んど破格非倫の調を以て蓊々地に其の確信を發現せしむれば也。こゝを以て、偉人は容易く門下生なし。門下生なきにあらず、直ちに其の膝下に近侍して親しく渇仰景慕するものゝ集まるや極めて晩し。之を古人に考ふるに、少なくとも數十年間逆境の後に於てとす。未だ曾て初めより大師の名を爲しつるものはあらざりし也。

但だ夫れ、俄然として容易に名を成し、迅速に黨與の多きを得るものは、必らずや一代の風潮に乘じて、其の流行に伴隨したるの結果にあらざるはなし。人間元來眇として小虫の如し。英雄の名を成す多くは時勢の貺たるとを思惟すれば、眞に大人小人の別を一視して微笑するの外なし。左れど、假りに人生の權衡を重しとして、彼の人物の輕重を計らば、大凡

そ、速かに名を成すものや、大抵、風雲の寵兒たるヿを斷定せざるを得ず。而して風雲の寵兒は、風雲の去ると同もに次第に其の價値を損ずるを蓋し免かれず。二氏の偉大を以てして亦た多少此邊の累なきを得ざるは、豈に恨事にあらずとせんや。

惟ふに、二氏の如き、初めは亦た逆境の兒なりき。逆境能く二氏の天稟を磨勵したり。然りと雖も、二氏の能く名を成して、俄然として一世の師表となりたるものは、未だ嘗て何等實際の功勳ありてにあらず、但だ其の能く時勢に適應したるが故のみ。二氏の敎育に志を立つるや、同もに海外の隆盛を觀て感發せしに由る。二氏は等しく西洋流の輸入を以て念願とせり。但だ、新島氏は、宗敎界に緣故深きを以ての故に、宗敎の國家の基礎たるヿを看破せり。福澤氏は、各國盛大の事業を歷觀して、實利の國家の根抵たるヿを看破せり。此に於てか、二氏昻然として天受の血性を動かし、眞に身を以て邦家に許すの慨あり、歸りて其の母國の爲に獻牲せんヿを期圖するの際、母國は自然の道行によりて西洋流義輸入の大勢を起し、此の大勢の二派の潮として、精神的、實業的の二流を生じたり。之れ當然の數にして元と奇しむ可らず。實業を主とするもの愈よ熱心なる時、他の精神界は之によりて愈よ慷慨して立てり。精神界の空論愈よ隆んなる時、他の實業界は之によりて愈よ隆盛となれり。二派は斯の如く相反撥して而して助長し、二流沛然として起れり。新島氏と福澤氏とは乃はち此の白波の上に立てり。一代の流行を追ふもの何人か二人の名を知らざらんや。此の流行に隨はんヿを學ふもの、何人か二氏の門に學ぶヿを怠たらんや。之れ乃はち大勢なり。

且つ夫れ、二氏は單に風潮に乘ずるものにあらず、殆んど風潮に先んじたり。乃はち、二氏は尤も急激なる西洋流義の主張者なりき。凡そ、基督敎家のうち、新島氏の如く西洋風の基督敎に深醉せしものはあらじ。氏は一時日本國を以て米國合衆の中に加入せしめんヿをすら希望したり。又、實業家のうち、福澤氏の如く西洋風の實業に熱心せしものはあらじ。氏は、すべての實業器關を容赦なく西洋風にして、折衷調和の迂遠に拘泥せんよりは、只だ大膽に何事も西洋の眞似をすれば足れりと迄で斷言せり。二氏の如きは、其の血性と、其の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雄資を以て、何の顧慮する所もなく西洋宗を説法したり。二氏は眞に西洋宗の大先達にして、其の監督法王を兼ねたり。誰か能く其の無鐵砲なるに及ばんや。

就中、福澤氏の如き、其の天禀の偉大と、不屈の豪氣とを以て一代を睥睨す。倘且つ衷心不滅の美妙の感慨を以て、時に崇高卓越の詩境に逍遙遊す。其の大平凡の雄資を以て、一種の道に貫徹し、悠々として達人の慨あり。能く人間の弱點を看破して、邦家活計の眞相を知る、何んぞ拘々然として儒者先生の顰に倣はんや。則はち、激越の調を以て、奇矯の説を斷言し、他の狐疑猶豫を鞭撻して、一世を文明國に交際せしめんとす。痛快何んぞ切なる。密かに識者をして其眞情に默會せしめ、暫らく其の壯語を措いて、直ちに其の赤誠に感歎せしむるものなきにあらず。而も惜しむべし、氏の感化力の非凡なりしと同もに、其の教導は誤まれり。其の實業的奨勵は、一種の實業書生を造り得たるも、堅牢眞面目の實業者を大成せず。氏は、實に一代の實業的風雲を導きて、其の刺激を普からしめたるも、未だ能く其の根柢に入ることをせざりき。氏の痛快を以てしては、則はち初めより之を期圖せしなるべし。氏や誤まることなし。吾人の如きは只だ望蜀の感を呈して密に之を惜しむもの也。

蓋し。新島氏は、其の爛熳の姿のまゝに落花の終を遂げたり。人皆な一夕の風を恨めり。然りと雖ども、吾人は新島氏の多恨多情を以てして、今日の涙痕を見せしむるに忍びず。新島氏は殆んど今日の如き結果を呈すべしとは預期せざりしならん。吾人は、榮を新島氏に歸して、其の短命を惜しむものゝ倘ほ多きを祝す。若王寺畔、愛國者の墳墓をして永く年少の理想たらしめよ。之れ有益なる刺激なれば也。

但だ夫れ福澤氏に至ては、今倘ほ毎朝一斗の米を舂き、夜半劍を拔きて、吟歌して舞ふの慨あり。吾人が、此の痛快にして偉大なる先生に所望する所や、豈に贊美を呈するの儘にして止むべけんや。敢て切りに先生の教育を評する所以のものは、即はち、先生門下八千の健兒に對して一言を寄する所あらんが爲め也。先生の豪氣未だ屈せず、丈夫何すれぞ諛辭を呈することをのみせんや。

惜しむべし。先生が皷吹し、刺激し、且つ教訓せられたる實業的氣風は、一種の書生論にてありき。先生常に書生論を罵

倒して、而して反つて其の結果の讀書々生を養成するに了りたる、寧ろ慘ならずや。試みに問へ、先生の實業論に傾聽するものは、如何の實業家なりやと、大凡そ、名家たり、舊家たり、堅牢万代の家門を建築せんとするほどの者にして、果して能く先生の實業論に服悅すべき乎、人は曰はん之れ保守的なれば也と。然れども、先生衷心の批評に於て豈に保守と改進との差別を氣にするほどの狹量あらんや。保守、改進もと同一根、家を成し、業を遂ぐるに、斯る區別に拘束せらるゝの空論あらんや。斯の如き空論は只だ書生政士の討論間にのみ用ゐべきもの也。夫れ、先生の敎ふる所は、大膽なる西洋流義なり、其の痛罵禁ぜざる所は、支那人流義なり。然れども、富を成すと支那人を以て第一とし、逆境に產を破らざると支那人を以て第一とし、かの西洋の實業家をすら後に瞠若たらしむるもの、天下たゞ支那人あるのみ。事實を考ふるに、未だ果して先生が支那人を罵倒する實業的理由の何なるやを知る可らず。先生が一意熱心なるは、會社組織 器械組織、鐵道、電信、陸蒸氣、及び、株の類なり。此を以て先生が門下數千の實業家は、皆な會社に入れり。會社に入らざるも、會社組織を理想とせり。所以る、會社屋、及び、株屋の類なり。先生屢ば敎ふ、卒業生は燒芋屋となるべし、書物を棚に上げて、紺の前掛をかくべしと、如何にも實際に近き敎訓にして、方今滔々たる儒者先生の多くは言はざる所也。而も尙ほ暴りに西洋流義を主張して、東洋流義をけなし、保守頑固を馬鹿にして、躁進急行を賞め立つるの氣味は、自然に書生の空想を躍動して、彼等をして一種の投機商たらしむ。其の富を成すや極めて早し、故に其の根抵あるものに至ては殆んと稀なり、一朝今の如き逆境に處して而して晏如たるものに至りては、未だ曾て聞かず。

抑も、商賣は活事なり、人氣、時勢の變遷に考へずして、豈に隆盛あらんや。然りと雖も、所以る商業道德の實地に至りては、古今東西、苟くも異動なし。得る所の容易なるものは、散ずるとも早し。利の暴大なるものは、危きとも亦た大なり。血を流し骨を苦しめたる財にあらずして、能く立家百年の基礎たるものはあらず。投機、俄か分限の僥倖によりて、子孫の計を爲すものは、子孫必らずや之を破壞す。凡そ、如此き道德は即はち實業敎育を主張するもの丶最先

に薫化せざる可らざる所にして、而して、福澤門下絶えて此邊の氣風なく、啻に之を欠くのみならず、反つて之を舊弊として馬鹿にするの傾向あるは、眞に痛歎の事とす。惟ふに、今の如き、福澤門下には、朞年ならずして百万の富を造り得る俊才はあらん、而も、二代の後に能く十万の清財を遺さしむるものは蓋し或は稀ならん歟。之れ、豈に眞誠實業界の慶事ならんや。今や、一代の風潮正に反轉の機を示し　明治政府の愚を知りて、德川幕府の用意を察し、西洋流義の賴みがたきを悟りて、支那流義の堅固なることを思ひ初めなんとす。亦これ一種の風潮、一種の流行なり、然りと雖も、此の新らしきもの起るに及べば、舊きもの廢れ、正に、三十年の勢趨に乘じて其名を成したるもの、之より漸く衰へんとするの時機なり。彼の新島氏の如き、福澤氏の如き、之を個人としては、非凡破格の才なり。其の天品を記念するもの万古決して失せじ。但だ之を公人とし、之を一種の代表者として、景慕禁ぜざりしものは、將に之よりして初めて異樣の開悟を感ずるに至らんか。

夫れ、新島氏は、精神的西洋流義を代表し福澤氏は、實業的西洋流義を顯昭せり。今や、時勢一轉して、門下、寧ろ反對の現象を呈し、新島氏の門下生は、實業界に於て一種の勢力となり、福澤氏の感化は、新日本の精神界に於て一種の勢力とならん。何となれば、西洋流義、開進主義に伴隨したる、精神的修養は、將來の實業界に於て一種の珍重品となるべく、福翁氏の品格、識見、及び、宗敎觀、を發揮したる其の著作　福翁百話以下の文書は、今後久しく新日本人の精神となるべければ也。果して然らば二氏は、其の志ざす所に謬まりて、其の赤誠の結ぶ所に存せんとす。二氏の有形的事業は破れ、無形的事業は永生あらん。之れ元、時勢に乘じたるの事業なるが故に亦た免かる可らず。時勢一轉して、時勢の行くと同に其の事業を葬むる、これ本來二氏の志ならずや、二氏豈に有形事業に拘泥するものならんや。

眞こも生ふる山田のみづをまかすれば
うれしがほにもなく蛙かな
西行

可憐楚々の愛嬌

人に愛嬌なかる可らず。愛嬌は心を引くの磁石、氣を爽快にするの花に似たり。人間もし之を欠かば、自づと人づき悪しく、實力ありとも、世上の歸依少なかるべし。之を考ふるに愛嬌は是れ人品の美か。美に妙味ありて自づから理義以外の趣きを呈する如く、愛嬌も亦た、人の伎倆、人の識見、人の品行等の外に存して、一種の妙味を惹起す。情感の世界に於て正さに欠く可らざるの氣稟とす。

夫れ、愛嬌の欠く可らざるは、男女同に然り。但だ、其の狀態に於て、二者各自、形容を異にす。男子に於ては、其の痴態をもて愛嬌とすと雖、女子に於ては、其の可憐をもて愛嬌とす愛嬌は素より敬畏の情の標的にはあらず。男子の敬せらるゝは、其の勇剛に於てし、女子の重んぜらるゝは、其の貞烈に於てするは論なしと雖ども、若し夫れ、美の情に相應じて、人に異様の快感を生ぜしむべき愛嬌の德に關して之を言はば男子幾分の痴態なかる可らず、女子、必らずや、可憐楚々人を動かすの姿を欠くとある可らず。

蓋し大丈夫の婦女子に對するや、之が保護に戰ひ、之が慰藉に困苦するを以て滿足とす。之れ、男子、雄資を備ふると多きに隨ひて彌よ多く感激する所の自然の情とす。英雄大抵可憐の娘子を撰ぶ可以のもの、即はち、此の情に由る、翻へつて、彼の婦女子が丈夫に好むの趣味を察すれば、彼等大率ね男子の男らしきを希望す。乃はち、大事に明白にして、小事に疎濶、磊々として餘裕あり、竄入して其の欠を補塡するとを得べき間隙あらんとを欲す。他なし、男子の痴態と云ふもの即はち是れなり。

此の故に、女學を主張して、女生の頭腦を緻密にし、識見を明亮にし、其の意氣を壯んならしめて以て其の獨立心を皷舞涵養するものと雖ども、別に亦た人間愛嬌の機微を思慮して女德特有の美を失なはしめざるとに心掛け、其可憐楚々の容姿の保存とに開發と、勘辨せずんばある可らず。男子の神經質と、女子の不愛憎とは、同に非なり。男子のコマシヤクレ

たると、女子の豪傑風なるとは、同に醜し。所云る女權擴張的の婦女子の愛嬌を失するは、此邊に用意なきによる。鹽の味を失ひたるは、外に棄られて踏まるべし。女の愛嬌を失ひたるは、爪彈きして苦笑せらるゝ耳。之れ決して女學の希望する所にあらず。

然りと雖ども、可憐楚々人を動かし、纏綿依々人に頼るの狀態をもて、女子の獨立心薄きの結果と見做すこと勿れ。此等の愛嬌は、情と美との結果なり。獨立心は、意氣精神の事なりたとひ、氣焔を含み、烈火を包むの慨ありとも、其の姿の優しくして、其心掛の殊勝なるを害はず。之れ實に截然として相分るゝの氣稟たるべし。故に惟ふ、其の双つながらを併せ有せしむるの敎化は、毫も難事とせず。否な反つて、女子本來の天稟に於ては、此如き敎化を施すこと寧ろ自然に、且つ有効なることを認むる也。

おもひいづるときはのやまの岩つゝじ
いはねばこそあれこひしきものを

平貞文

一二

某女學校の卒業生に告ぐ

成瀬仁藏

本邦の女子教育尙幼稚なるを免れすと雖も、旣に多少の經驗を積み、利の存する所、弊の伏する所を看取し、今や着々改良上進を謀るの曉とはなりぬ。然るに貴校は幸にも此曉時代に生れ、加るに之に從事せらるゝ諸先生は敎育に多年の經驗ある方々なれは、本日當校より卒業せらるゝ諸子は善良の薫陶を蒙り、後來天晴の良妻賢母となり、以て十分に女子たるの本分を盡し、女子教育の好果を世人に示し玉ふを信じて疑はさるなり。

併し諸子の一生涯中に於て、今日は花の時代にして實の時代に非す、されば今日こそ最も關心すべきの時代なれ。諸子の今日あるは素より螢雪の勞を積まれしに由ると雖も、諸子の前途には困難の山あり、辛酸の河ある亦前日の比に非ざるなり。故に後來何をなすへきか、如何なる決心あるかは、洵に諸子に取つて重大なる問題なりとす。諸子は身自ら之を熟考せしのみならす、諸先生も亦懇々之を諸子に諭し玉ひしならむ、余亦何をか加へむ。只一言所懷を述へ以て諸子が參考の料となし、決心を確むるの資に供せむとす。

何が故に諸子の前途は重且難なるや、請ふ聊か之を說かむ。夫れ花咲かすむば、何を以てか實を結ばむ、されども花咲けばとて必すしも實を結ぶものに非す。覩よ昨年の稻作を、花は豊に咲きしとは云へ、蟲に非されば風、風に非されば水の害する所なり、幾多の田圃は實を荒蕪に歸せしに非すや。諸子に於ても亦然り、設令今日は諸子の花の時代なりとも、今後に於ける諸子の精神品行一歩を誤るときは、多年の勉勵苦學は水泡に屬し、諸先生の辛酸苦楚も徒勞に歸すべし。學校及諸子の價値如何は、從前に於ける諸子の勉勵苦學に依て定まるに非す、今後諸子の實行如何に因るのみ。抑も女子教育の批難なるもの、多くは女學卒業生の言語擧動が世人に滿足を與へざりしに起因せすむば非す。勿論世人の批難は悉く信すべきものに非す、或は批難者の誤解に基き、又は偏見に由るものなしとせさるも、亦卒業生の過失與つて力なくむばあらす。女學卒業生には必すしも理想なきに非す、進歩の氣象なきに非す、實行の熱心なきに非す、されば何が故に彼等は

卒業後に於ては重く進歩せざる乎、何が故に失望落膽する者多きや、何が故に或は過失に陷り、或は平凡に過ぎ去る者多きや。蓋し卒業後の境遇は一層錯雜困難なればなり。

學校の生活は素より易々たるものに非ずと雖も、内には父母あり、學校には教師あり、二六時中睡眠にも、運動にも、課業にも、一定の規矩順序あり、能く之を遵守せば可なり、されど今後諸子が入學せられむとする學校には、一定の教師なく、一定の規律なく、而かも境遇錯雜にして、難局の出没端睨すべからず、諸子の蝸蟠逡巡すること亦鮮少ならざるべし。男子の如きは中學より高等學校、高等學校より大學と、順次採るべきの進路あるのみならず、大學卒業後と雖も又各自の職業畧一定せらるものゝ如し。然るに婦人に於ては一科の專門を學ばむとするにも、女子には要不要の問題あり、又何を擇ふべきかの問題あり、人に嫁するにも昔日の如くに見ず知らずの人に嫁するも心安からず、さりとて結婚の前親しく相交り相識るは國俗の許さゞる所とす、於是乎諸子は亦蝸蟠せざるを得ず。其他家庭の關係なり、子女の教育なり、親戚朋友の交際なり、社會の事業なり、凡て女子が世に處するの道は獨り其事の性質上然るのみならず、風俗變遷の時代に際會するが爲に、一層の錯雜困難を有す。況むや男子は相應の知識を受け、一定の社會に立つも、女子に至つては過少の知識を以て、紛糾錯雜せる難局に應ぜざるを得ざるに於てをや。女子處世の困難なる男子に勝るも劣らざるを見る。かるが故に、諸子が前途の困難に打ち勝ち、諸子の理想を實現せむと欲せば、十分に知識を研磨し、智慧を鍛錬し、且品性を修養せざるべからず。請ふ試に之を說かむ。

（第一）知識の必要。　女子の知育に關しては、古來議論紛々たりと雖も、余が女子の教育を主張し、且諸子に進歩を促す所以の重なる理由は、左の二點に外ならず

（第一點）は女子自身の進歩の爲なり。蓋し其意吾人が女子を教育するは、單に女子を以て世俗に實益を與ふる一物としてなすに非らず、そが進歩と幸福との爲に万物を給せられたる精神としてなすにありと謂ふに在り。

男女各々其特性を異にすると雖も、共に進歩すべきの精神及進歩したしとの欲求を有するに至つては同一なり。而して此精神を發達せしめ、此欲求を滿足せしむることは、啻に世の實利を與すのみならず、大に人生の幸福を增進するものなり故に女子教育の必要は單に内助の爲め、自活の爲め、若くは社會改良の爲めに非ず、女子も亦進歩發達すべきの天性を享有せる精神を備ふるが故なりとす。然るに此精神の進歩は知識の開發を外にして得べきものに非ざるを知らざるべからず。

諸子は本日卒業の盛典に列せらるゝを以て、諸子の究極の滿足とはなさゞるならむ。諸子の精神には尙益々進歩したしとの欲求充溢するならむ。是れ實に人間固有の天性にして、人間の人間たる所以も亦實に茲に存す。若し此天性の發揚を阻遏せむか、是れ人間を禽獸にせむとするものなり、是れ人間の幸福を剝奪せむとするものなり。然るに女子の知識を開拓し、そが進歩を謀らむとするや、世人往々之に反對する者あるは、吾人の解する能はざる所なり。女子は何の罪ありてか人間固有の天性を琢磨するを得ざる乎、女子は何の過ありてか、人間固有の幸福を享受するを得ざる乎。女子の知識を研磨せずして、而して女子の淺見短慮にして身を賊し、家を毀ち、社會を害するを告む、何ぞ自家撞着の太しきや、何ぞ無理殘酷の甚しきや。諸子益々奮つて進歩すべし、一生の間進歩すべし、進歩して以て人間固有の天性を開展し、人間固有の幸福を享受すべし、何の遲疑することかやある』

（第二點）は女子の天職の爲めなり。詳言せば家政の爲めなり、子女教育の爲めなり、社會の爲めなり、國家の爲めなり。既に演述せし如くに諸子の職務は之を男子のに比すれば却て錯雜にして且困難なる所あるが故に、相當の知識を備へずむば到底女子の天職を完ふすること能はざるべし。

夫れ人生の事業何ものか困難ならざらむ、而して就中最も困難なるものは人間を教養すること是れなり。然るに女子は此最も困難なる業務を執るを以て其天職の一とす、其業務に相當せる知識なかるべけむや。家屋の修繕よりも人身の疾病を治癒するは困難の事業なるが故に、醫師は工匠より多量の知識を要するが如くに諸子が妻母となりて子女を教育するに當り、知識の必要なるは言を俟たざる所也。かるが故に諸子は進歩すべきの精神を有する人間たるが爲のみならず、又子女教養の天職を擔ふたる女子たるがため、愈々知識を開拓し、知能を研磨せざるべからず、況むや其他女子の天職一として知識を要せざるものなきに於てをや。

（第二）智慧の必要。　智慧は知識より來るものなれば、知識なくむば素より智慧あることなしと雖も、智識と知慧とは亦自ら多少の差異なくむばあらず。試に一例を引て之を說かむ。余が知人某實業家嘗て炭坑に從事せむと欲し、學士を聘し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て之を調査せしむ、學士報するに到底成就の見込なきを以てす。某家は學士と意見を異にし、辛苦經營の後、遂に其目的を遂げぬ。又某實業家あり、沿岸の淺海に一島を創築せむと欲す。學士某其業の擧るべき希望なき所以を說くも、某實業家は自ら工夫を凝らし、日夜或は潮勢を調べ、或は風向を察し、慘怛たる苦心遂に空しからず、一大島を創築するを得たり。是れ他なし、學士の知識實業家に劣りたるが爲に非ず、其知慧及ばざりし結果なり。故に知識は學理學別を知るの謂ひにして、智慧とは之を應用するの才能に外ならざるなり。乃ち知る、知識あるも智慧を鍛錬せざるときは、所謂論語讀の論語知らずたるを。

朝に起き夕に寝れ、渴すれば飲み、飢うれば食ふが如き一定の動作習慣に於ては智慧の必要なしと雖も、人間萬事爾く單純平易なるものゝみに非ず。設令同一事にせよ、之に處するの方法に至つては二三に止まらざるなり。例せば、諸子の今後の生涯を送るにも種々の方法あり、其方法の如何に由て或は賢となり愚となるべし、或は貧に陷り富に登るべし、或は惡に迷ひ善に達すべし、而して今や諸子は現に此危機一髮の際間に遭過す。諸子よ、妙齡は再び期すべからず、須らく深く考へ、遠く慮り、悔を後日に招く勿れ。又一例を擧げむに、金錢を使用するにも樣々の手段あり、以て儉なるべく奢なるべし、以て慾なるべく吝なるべし、以て富むべく貧なるべし、以て家を與すべく家を亡すべし、以て國を強くすべく國を弱くすべし、殊に一家の政に於ては、夫は財を造り、妻は之を消費するの地位に立ち、而して北米ハーヴアート大學總理の曰へる如く、金錢を使用するは之を贏くるよりも困難なるが故に、女子たるもの一段の智慧なかるべからず、主婦の任務も亦重哉。

諸子が學門をなすにも、婚姻を結ぶにも、世人に交際するにも、社會事業に從ふにも、家政を齊ふるにも、子女を教養するにも、古風を守るのみては不可なり、さればとて歐米風のみにては尙不可なり、然らば如何せば果して能く中庸の道に處するを得べきや、此處ぞ則ち智慧の必要なる所とす。當今の女學卒業生にして、往々過失に陷りたるものあるは、此難局に處するの智慧に乏しかりしに職由せずむば非ず。夫れ漢法醫が廢嫡者として輕視せらるゝは何か故ぞや、知識足らざればなり。今出の開業醫學士が比較的に閑暇無事なるは何か故ぞや、老錬の醫學博士に智慧及ばざればなり。女子の失敗も亦然らざるを得むや。乃ち知る、女子に知識の研磨、智慧の鍛錬の必要なることと愈々明瞭なるを。

されば、臨機應變の才を磨き、學門知識を應用するの能を鍛ひ、淑女となり、良妻となり、賢母となり、緩急其宜を得、中庸に處するの道を學ぶは、今後諸子に取つて極めて重要なる學課に非ずや。

（第三）品性修養の必要。　熟々現今の男女學生の實情を觀察するに、必ずしも悉く讀書を勉めざるに非ず、學理を講ぜざるに非ず、文章妙ならずとせず、談論巧ならずとせず、されども高潔偉大の理想を懷持し、苦心焦慮之れが實現に汲々たる者果して幾人かある。讀書何の爲めぞ、攻學何の爲めぞ、學校を卒業せむが爲めなり。卒業は何のためぞ、可成高給の月俸を得むと欲するは男學生なり、可成富有の家庭に嫁むと欲するは女學生なり。是れ一旦月俸を取るの身となり、他人の妻となるや、其學識人物の日に月に退步するを見るも、進步は得て期すべからざる所以なり。時に大言壯語、國事と談じ、世界の大勢を論する者無きにしもあらず、されども眞個に國家を愛するの至情、溢れて然るに非ず、多くは自ら爲にする所あるに因らずむば非ず。故に詳に其人の操行を洞察するに、嘔吐に堪へざる者鮮少なりとせず。彼の新聞雜誌に寄稿するは何が故ぞや。其目的たる、主義意見を世に擴張せむが爲めか、將た原稿料を得、若くば名を世に賣るか爲めか。二者孰れが多きや、余の呶々を俟たざるべし。女子に於ても亦然り。學を修め、藝を習ふを以て婚姻の媒介とせば、身に綾羅を纏ひ、化粧を施すと、何等の撰ふ所やあらむ。嗚呼精神の鍛練、品格の修養、汝何ぞ青年男子學生に疎ぜらるゝの孔しきや。

是れ獨り學生のみ然るに非ず、學生陶治の重任を負へる教師に至つても亦然るを視る。我邦維新以來教育學輸入せられ、教育術も亦大に進步し、今や讀書を教へ學理を授くその師鮮しとせず、然れども教育の眼目たる人物を造る所の教育家に至つては、晨星の感なくむばあらず。讀書を教へ、原理を授くるの師にしても、眞實教育を尊信し、熱心學生を愛する者、果して幾人ぞや。頃日人あり曰く、中學教員立身の秘訣は、同一學校に在職すること二年より少かるべからず、又多かる可らず、而して轉勤は增給の手段なりと。教育家、教育を知らずとは、それ此謂歟。是れ唯一例に過ぎずと雖も、亦以て今日精神的教育の振はざる所以を窺ふに足りなむ。

諸子よ、諸子は書を讀み、學を講ずるに當り、諸子の眼前に揭げたる目的は何ぞや。字義を了解し、教訓を記憶するは、單に結婚の媒介に供にせむが爲めなりしや、將之に依て以て精神を鍛錬し、品格を修養せむが爲めなりしや。諸子は慥に役者の徒に屬せらるゝは、余の信じて疑はざる所なり。是れ余が本日の卒業盛典を殊に祝する所以なり。

余の知れる某女學生あり、漢學に熱中す。余密に其意向を探ぐるに、徒らに字句を解し、孔孟の教義に通ずるを以て目的とせず。直に孔孟の精神を以て、自家心情の鏡となし、之に對して自家の精神を裝ひ、自家の品格を飾るの資に供するにありき。故に其爲人や、日月と共に進歩するを認めたり。

又某女學生あり。常にバイブル、セーキスピーア、エモルソン、テニソン等を愛讀す。而して其之を讀むや、感ずれば直に之を手記するも、未だ文を草し、話を飾るの料に用ひず、只自己の精神を養ひ、品格を育つるの具に供したりき。さるからに、口を以て說かず、筆を以て論せざるも、能く人を感化し、又能く人に心服せらるゝに至りぬ。

又某婦人あり、未だ世に知られずと雖も、一個の賢婦人たるを失はず。常に好むで歷史記傳を涉獵す。嘗て余に語て曰く、妹は偉人傑女の傳を讀むに際し、期する所は其長所を採つて直に之を實踐窮行せむとするに在り。偉人傑女は其質非凡なり、我等凡俗の得て企及すべき所に非ずとして之を讀むは寧ろ讀まざるに若かずと。

諸子冀くば讀書により、先輩により、經驗により、益々知識を擴め、智慧を研き就中最も品格を養ふに苦心し、以て天性を發育せしめ、幸福を增進し、一身の進步、社會の發達を謀らむことを。夫れ實踐窮行は最も能辨なる、最も感化力ある說教なり、最も人心を服せしめ最も氣力ある論文なり。女子教育の功能も、諸子が品格を以て世人に接するに至らば、誰れか之を疑らざる者あらんや。それ品行は如何なる塲合、如何なる境遇に行くも、常に有力なる感化を及すものにして、極めて流通廣き無形の貨幣なり。諸子にして第一に益々品格を高め、知識を蓄へ、智慧を錬りなば、諸子の前途如何に困難なるも、錯雜なるも、などか失敗蹉跌することあらんや。

人あり嘗て平田篤胤に歌を請ひければ、篤胤は

假初に歌をな乞ひそ篤胤の
　いふ言の葉はうたならんにも

と咏ぜられたりと。其意蓋し篤胤其物が旣に歌なり、何ぞ別に歌を要ぜむやと云ふに在り。諸子も亦請ふ自ら品格となり、眞に人を化するの女德を備ふるに至り玉はむことを。

女囚の狀態

さる監獄學に通じたる人の話を聞くに、囚人は男女共に感情につよきものにして、教誨などする時に、子供の事などを語ると皆々感に入りて泣き出し、殊に妻子でもあるものならば猶更感じが強し。されど其感じたるや、一時間も立てば直に忘れる。夫故に監獄にての教誨談は、同じ事柄を二三ヶ月置いて話しても、囚徒はこれで二度目なりとは思はず、即ち先に感じたるとの記臆なきなり。かゝる情態は女囚に於て一層甚だしとぞ。

監獄内に行つて見るに、男囚はまだ幾分か見處ある相貌をなせども女囚に至つては、醜の又醜、女囚ほど實にいやなるものなし。彼等はまた決して耻しい風もなく平氣の平左で、實にヅウヽヽしいので、甚だ不快に感ずるとぞ。凡そ犯罪の度

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

數の多きとは女子は男子に優り、また女は男よりも大膽なる所業をする。而して改悔の實も擧らぬ、女囚は殆ど濟度の見込なきものなりとぞ。

女囚の大部分は密賣淫なるが、此犯罪者は殊に開港場に多し（記者曾て聞く横濱にて密賣淫五十犯なる婦人ありしと）彼等は二三日位の刑期にて拘留せらるゝものなるが、この處刑は何の効能もなく、入獄者も質は休息に來る位の考にて居る、而して極めてヅウ〳〵しい。また子殺しにて入牢するものも多し。

女囚が耻もなく、ヅウ〳〵し。罪を犯す程のもの故元來碌な者にてはなけれども、なほ此に至らしむるには、獄裡の取扱ひにも關係するが如し。獄裡にては、毎日勞役の後入監の際には屹度丸裸にして身躰檢査を行ふ。囚人は往々釘の折れ、鋸の折れなどを、巧に隱して、男囚でも肛門などに入れて持ち入り、それにて破牢を企てることあり。故に精密に檢査する、而して女囚を檢査する時は、勿論女子の看守にて檢査し男子は決して立ち會はぬとはいへ、男子よりも酷しく取扱ふなり男子は裸躰になるとは何とも思はねども、女子は天性之を耻づる處なるに、而も最も耻づべき取扱を受ける、それも毎日の事なるを以て、如何なる女も、此に至りては、遂に耻も何も忘れて仕舞ふは自然の數なり。彼淫賣婦の如き破廉耻極まは者にても此取扱は嫌に思ふべきに、況して一時の出來心よりなる子殺又は和姦犯罪者の如きは、最初は堪へざる處なるべきも強制執行を受くるの果は全く廉耻を破り了らしむるに大に預つて力あるとゝなり。この女囚身躰檢査たる、獄制上必要なるべきも、女囚の精神には大害物となりて、一方にて此事を行ひつゝありては、迚も教誨などは何の効能もなきなりと。

西洋の一犯罪學者の說に、女子は天性犯罪の傾向を有すと、說の是非は頓に判すべからざれども、また理あり、考ふべきの說なりといふべし。

よしの川見るかげさへに暮れにけり
さまらぬ春のやまぶきの花
頓阿

女史の半身アンナ、ゴルドン嬢

○會頭死後の矯風會

米國の婦人矯風會員等は、二十有餘年其首領と仰ぎたる偉人物の遺骸を奉じて、之をローズヒルの塋域に葬らざるべからざるの不幸に會せしや、世界所在また之を悼戚して、市俄高テンプル又はエヴァンストンの草盧に寄せ來る吊詞電文極めて多く、天下のありとあらゆる日刊新聞にして哀辭を揭げざるもの殆ど無く、また東西南北、凡そ婦人矯風會の存在する處にては、之が追悼會を開きたり。

扨て女史歿後の矯風會は萬國婦人矯風會にては同會副會頭なる英國のヘンリー、ソモルセット侯爵夫人、米國婦人矯風會にては、同會副會頭リリアン、エム、エヌ、スチーブンス夫人、各々其正會頭事務を攝す。いづれ双會頭とも、大會を開きたる後にて改撰せらるべしと雖も、當撰者の即ち此二夫人ならんとは、今より知れ渡りたる事實なり。ソモルセット夫人は才幹地位共に高く、よく萬國婦人矯風會を率ゐるに足れりと雖も、比年多病なれば、其秘書記を得るに非らずんば、劇務を攝し難からん。ウイラード女史に附して、二十一年間秘書たりし、ゴルドン嬢は、いづれ新會頭の秘書となるとなるべし。而してまたソモルセット夫人會頭となるの日よりして、萬國部の本據は、事實上英國なるエルスノア城内に移るものなり。

萬國矯風會にては、また故會長が最後までの掛念なりし、シカゴ本部建設の負債償却の爲に、廣く義捐金を募集するの計畫に着手したり。同本部は十三階より成れる宏壯偉大なる建築物にして、其最下層の大講堂はこれまでウイラード館と稱し來りたるが、いづれ此テンプル全躰をば名くるに故人の榮名を以てするなるべし。又ゴルドン嬢は目下ウイラード傳編述中にて、大成の上は、ソモルセット夫人の招きによりて、英國に赴くべしといふ。

○ゴルドン嬢

故ウイラード女史が、廿有餘年の事業の莫大なりしとは、前號の史談中にも述べたるが如くにして、女史は實に多く勞して

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

多く成しなるものなるが、爰に女史の大事業を考ふるに就いて、常に之を輔佐したるゴルドン孃の事を記臆せずんばあらず。凡そ大人物の事を成すや、其裏面には、賢夫人若くは、良友の內助なくんばあらず、ウイラードに於ける良內助は即ちこのゴルドン孃なり。孃はウイラード女史の爲には、顧問たり、良友たり、愛娘たり、またウイラードを夫とすれば、此ゴルトンこそは、實に賢明なる妻なりしといふべけれ。二人が中の友愛の情たる二十一年間毫も渝らず、昔のダビテがヨナタンに於けるも、かくありしやと思はるゝ計り、而して由來嫉妬つよき女子の群の中に在りて、誰ありてこの友誼を妬むものなく、ウイラードといへば必すゴルドンをいふ。ウイラードの孃を愛するの切なる、孃を呼ぶに "Little Opportune." "Organized Providence" "My Guide, Philosopher and Friend," 等の語を以てせしを見て知るべく、且其才能に感嘆せしとも、亦之にて知らるべし。而して又女史の人に向つて孃を記するにも、多くは其姓を稱せずして其名のアンナを呼びしは、まとに已が愛孃若しくは愛妻なるかの如き觀あり。女史またかつて孃を評して、才女（A gifted girl.）と稱したり。ウイラードの此良輔佐を得たるは、實に擴大なる攝理にして、また至惠の天賚なりしといふべし。

攝理の來る、人は之を偶然と思ふ。ウイラード女史のゴルドン孃を得たる、人より見れば、實に奇緣なりといふべし。孃はボストン府の人にして、年幼にして音樂に長ぜしが、此技こそ、實に此奇緣を結ぶの便なりけれとは後にて知られたり。今を去ると二十一年以前、米國の大說敎師ムーデー氏の感化によりて、ボストンに信仰大復興の起りし事ありしが、其時ウイラード女史は、ムーデー氏を助けて、婦人の會合を司りたりしに、或日女史、衆中に向つて、誰人にてもオルガンを彈き得るものあらばと招きしに、之に應じて、臆しながら壇上に登りし一少女あり、これぞ即ち此ゴルドン孃なりける。ウイラード女史が、其自敍傳中に、「我小風琴樂師」と署して、挿みし可憐なる處女の肖像は即ち孃が當年の風丰なりと覺ゆ此時以後孃は常にウイラードの傍にありて奏樂を司り、此會終るや、また女史に隨つて、其のエヴアンストンなる草廬に赴きて、それより今、其の賴めりし人の臨終の際に至るまで、其傍を離るゝとなく、女史在る所には孃ありて女史の

事業には即ち孃あり。ウイラードの事業の種子を作り出すや、孃は常に之を考査して、これが爲に蒔くべきの地を拓き、これを種ゑて之を育成せり。ウイラードは實に當代稀有の大天才なりき、此大天才の自由に活動し得べき境遇周圍を製出せしものは即ちゴルドンなり。ウイラードの爲に旅行の針路を按じ、財政を監せしものは即ちゴルドンなり。孃は些細の煩ひ、又は俗務を自ら處置して女史に預り知らしめず、以て女子の天才をして常に障礙なく、自由に活動することを得せしめ、事々に於て女史をして毫も內顧の憂なからしめたり。

孃はウイラード女史の爲には、實に又とあるまじき良內助者なりき、二人は二身にして同躰なり、共に女性なりとはいへ、適當なる評語を用ゐ來れば、則ち最も美しき夫妻なりしといふべきなり。此の最愛最美の伴侶今や其一を欠く、孃の悲しみや察すべし。

孃は、又文筆の技に長じ、ウイラード女史は遺言して、ソモルセット夫人の文事秘書たらしむ。矯風會の役員等はまた孃に乞ふに故會頭の傳記編述の事を以てしたり。孃はまた幼稚園教育に熟妙にして盛名あり。其才幹と其經歷とより推せば、ゴルトン孃たるものは、必ずや當に未來の萬國婦人矯風會々頭なるべし。而してウイラード既に逝りては、會內、多多たる有爲婦人を有すと雖も、其骨髓たり精腦たるものは、即ち此人なり。蓋し又ウイラードてふ偉大の名の記せらるゝと共に、人の忘る能はざるものは、このアンナ、ゴルドン孃の芳名なるべし。曾て名譽あるの地位を得ず、たゞ會頭の秘書たるに甘んじて、而してこの大事業の樞機を執る、孃も亦これ當代女流中有數の人傑といふべきかな。

附記前號『史談』無冠の女皇と題して故萬國婦人矯風會々頭フランセス、イー、ウイラード女史の評傳をものしたる一文は、目下東京在矯風會世界巡回遊説員クラ、、バリッシユ孃の手許にて英譯して、右に記したるアンナゴルドン孃に送るべき旨、記者まで通告ありたり。

壺中天地乾坤外　夢裡身名旦暮間

學窓の回顧

なつかしきは、人の眞情なり。紀念、報恩の心、これより生ず。大きくして、愛郷、愛國の情感となるものなど、惣じて此邊の修養より來る。

夫れ、家を出でゝ、社會に入るの仲間に、第二の家の如く、社會の玄關の如き、一種の家庭あり。學校といふ。玆に、眞の父母に次ぎての親あり、眞の世に先だちての社會あり。蓋し、家と社會との間の掛橋なる歟。年少、一と度び、此の處を過ぐれば、種々の効能あり。

故に、學校の紀念を長久にして、其の感恩を濃厚にする時は、一つには、家を念ふの情を續け、二つには、世に慣るゝの緒を養ひ、二者の間の變化を急激ならしめずして、以て人の情感を穩かにし、薄弱なる人間をして人生の變調に痛ましめず、より多く其の素直の氣品を維持するの功あり。學校に輕薄なるものは、自づと其の家にも輕薄にして、又、社會に於ても輕薄なり。忠臣の孝子の家より出るが如く、家庭を愛するものと、學校を愛するものと、國を愛するものとは、略ぼ同根よりす。學校は其中間の途行なれば、爲めに此の情感を杜絶せしむる如きとある可らず。生徒をして久しく學校を念ぜしむべきと同に、學校も亦た此の思ひを念はしむべき化力なくんばある可らず。長く、學校に對するのゆかしさを抱かしむるは、必らずや、其道あり。

蓋し、此の道の主點を言はゞ、在校中、師弟の感應濃厚にして、情誼の絶ちがたきもの大いに熟するを以て第一とするは勿論の事なり。たとひ、他の何等の方法を具備すとも、最も先づ此の一事を欠かば惣べて効なし。これ言を待たざるの義なり。

左れど、吾人は、今ま必らずしも、此の般の事を言はじ。何んとなれば、吾讀者は、既に已でに此等の消息を知覺するとの精しければ也。吾人は寧ろ玆に他の一小事を言はん。これ反つて小事として屢ば忘却せらるゝ所なれば也。

夫れ、ゆかしさは、懷舊の情より發す。懷舊の情は、不變常久の故に養はる。未だ必らずしも、壯大の結構、偉麗の美、珍奇新鮮の故によりて養はるゝには非ざる也。たとひ、茅屋破窓の下、不規則なる机と、固き腰掛とに倚り、不十分なる器

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

械と、殺風景の掃除の間に在住したらんとも、若や年を過すと三四五、朝々夕々、絶えず其の景に慣れ、殆んど之に融化して、其の狀態の裏に安住せば、住む所都となり、居る所家となり、遂に之と離る可らざる「情合」を生ぜん。之れ、其の周圍の不變にして、之に慣るゝことの大いに熟すれば也。若し此の如くなれば、去つて三巴遠き他郷にさすらひ、出でて多年の旅客となるとも、或ひは、茅屋の破れたるを想ひ、もしくは、机の高低を念じ、庭前の樹木の影を慕ひ、階下の砂利の戯むれを忍び、譯なき紀念が最も有力の紀念となりて、之を回顧すれば、非凡の爽快を感ずるなるべし。之れ、久しく其の光景に慣れたるの致す所也。

もし夫れ、同窓の人ありて、相會して此等淡泊の回顧を語り合はば、他人が聞きては眞に阿房らしきほどの些末なる光景も、彼等に取りての無上の樂しみとなり、彼處の土塀、此處の破れがき迄、皆な談話細々の一條件に入るべし。若し夫れ此等同窓の人にして、一日其の舊き學校に來たり見、かの夢み慕ひたる茅屋、破壁も尙ほ依然として存ずるを見ば、其のゆかしさは尙一入なるべし。

凡そ、此等の事、皆な、學校の光景の不變常久なるに由れり。故に、學校はたとひ其の規摸を擴張することありとも、其の舊態を變化せず、成るべく、其の光景を元のまゝに保存するを以て一大要件となす。これ宛ら、家庭を諸々の兒等の紀念となさんが爲め、其の家屋と、家風とを一定不變にすると同日の事なり。屢ば變へて其の紀念を壞ち、其の回顧の情を弱くして、其のゆかしさを薄くするは、家に於ても、學校に於ても、同に不可なり。

又、之に緣みて一事の言ふべきことあるは、姉妹成るべくに同一の學校に入學せんことこれ也。氣風の感化同一、得べき習慣も亦同一にして、彼等姉妹が終生の情感をして相一致せしむるのみならず、彼等相會して同窓の紀念を一つにし、互ひに第二の家を一つにして、出處、故鄕を同樣にするの感あらしむるは、同胞たる彼等が一生の交情の上に至大の影響あらんとすれば也。

悠然として山を見る蛙かな　　一茶

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

教育

教士獨嘯

◎教育界の談しとなれば、第一が、文部省と文部大臣との批評で、百人が百人、千篇一律の工合だ。夫れ程のさもしい見識で、教育の刷新だの、精神的の教育だのと、よくも言はれたものである。試みに、歐米の教育界を見ても、文部大臣の政策などを氣にして教育を振起させやうと云ふものはない。今の學者が何事でも西洋の眞似をするとならば、どうか此邊の見識を眞似て貰ひたいものだ。

◎一體、學校と云ふ組織は、究策から出たとで、元々、教育上の得策では無いのだ。多くの學科を一人の教師で敎へるとが出來ないと云ふ所から、多數の教師が集まつて、夫々、受持を擔當するのであるから、其の敎ふる所が自づと分析に渉り、各自批評的の理屈に流れて、所云る學問の生命、即はち、生ける學問と云ふものを與ふるとに不便なのである。學校の書生が、兎角理屈に流れて生命なきに至るは此の故である。ソレデ、此の弊を除くには、學科の調和、教授の統和、學理の振活などに工夫して、全たく此に任ずるの人と力量と德望とが活動して居らねば成らぬのである。もし之を欠かば、學校は即はち塾に劣るので、所云る文明流の教育が、古風の偏狹なる學問にも及ばぬものとなる譯である。

◎日本は昔しから後進國の氣味で、いつでも海外の文明を輸入するとに勉めた。ソコデ、外國の文明を輸入するとが流行すると、之を記載した書物を無暗に尊敬するやうになるのは、自然の數であるから、日本は又むかしから書物を無暗に尊敬する迷がある。今でも、書物を多く讀めばエライ學者だと思ふ癖が依然として殘つて居る。一向、その活用とか、見識とか云ふものに頓着しない風が多い。苟しくも、經濟學者だと云つて、國家の經濟の實際が分らず、苟しくも、教育學者だと云つて、其子の育て方すら覺束ないやうでは、眞の學者とは言へぬ。兎角、書物と云ふものは、人の智識を朦朧にするものだから、之から這入つた人は遂に徹底しない。實際から書物に行かぬ人は、いつ迄でたつてもコツに合はぬ所がある。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

◎尤も、活用と言へば、直ちに算盤づくの利得に關して言ふものと思はれると、少しく意味が違ふ。必らずしも、俗界目前の應用を言ふのではなく、只だ其の活用を言ふので、例へば、哲學や、倫理や、美學でも、之を世間に用ふると云ふ上からでなく、之を我本躰に用ふると云ふ上から言ふのである。目的が世間の爲にすると云ふのであつては、まだ少し足らぬ所がある。世間よりも先づ我一身に應用して夫から世間に及ぼすと云ふやうにならねば、眞の活用とはならぬ。哲學ならば、其高尚の道理に我心を躰して、死生之に安んずるの決着と、其理を無上の尊躰として、何ものをも之に換へがたい迄に思ふ忠實とが無ければ成らぬ。然るに、今の哲學者は一向其邊の自信も自任もなく、銅臭、俗氣、紛々として、同もに食事するのも嫌なやうな心持がする。即はち、其學者たる所が悪るいのでなく、學者たらぬ所が面白くない。倫理でも美學でも其の通りで、先づ其一心に德と美とを應用し得ぬ以上は、活用とは言へぬ。

◎世には無用の用と云ふとがある。無用に爲つて居るのが即はち大用なのである。學者が、直接世の利害に關係せず、超

然として、理と道とを樂しんで居る高雅卓越した風格は、どれほど人心の風調を潔よくして、自づと世の治安を維持するか分らないものだ。昔しから、仙人は直接、世の益を計らなかつたやうに思はれて居るが、其の世の益を計らぬらしい所が即はち世の益となる結果を奏したので、コヽが人生の微妙と言ふものだ。支那でも、現に、道士と云ふものが多くある。眞に、貧乏で、キタナクテ、殆んど支那人流義の正反對の生活を仕て居る。彼等は、拜金宗の眞中に超然として其格を保ち、丸るで人間以外の人の如き調子で構へて居るから、之が神仙の氣自から發作して、自然と周圍の剛慾を調和し、甘まく鹽梅して實際世間を治めてゆく。コヽが、治めざるの治めで、眞の治めと云ふものだ。

◎此頃は、國家的敎育の聲が少し止んだらしいが、其の夢はまだ覺めぬようだ。國家の爲め〳〵と言つて氣を引立てるが、無理の初めで、子供などに、國家と云ふものは分るものでない。つまり空想を抱かせて、小理窟を言はせる計りだ。たとひ、又、少々は分つたにしても、中々其の敎化が届くものでない。第一、敎育者御本人が眞に國家の爲にして居るも

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

のに余り多くはない。夫にそうして其の感化が與へられるもの乎。心。實に國家を思ふにあらずして國家々々と言はせるのが、ツマリ他日の八釜し屋を造るわけで、先づ今の官的教育者は自から攻擊される種を播く樣なものだ。總べて、何の爲と言ふのが宜しくない。既に其の間隙があつては、無意識になれぬ。眞の活智をなれぬ。之を躰し、之を自得すると云ふ境界に至らしむることが出來ぬ。眞の教育の道でない。第一、大人にしても、小供にしても、國家の爲め〳〵と言ふ人の本色を吟味して、之を他の無邪氣に無意識に勉强する人物に比べて見れば、どちらがツマリ國家の爲になるかと云ふことが容易く分る。ツマリ、國家の爲になると云ふのは、其の結果が[illegible]に國家の爲になるのが願はしいので、只だ國家の爲めと口に言ふものが望ましいのでは無い。

◎學校の參觀などゝ云ふて來るものもあるが、一日や二日、觀て分ると云ふほどの人は餘り來もすまい。抑も、何を見るのか。テーブルの位置や、空氣の流通位を見るか、學科課程を見るか、書物を何んだと聞く位の事だ。凡そ、學校を見やうと思へば、其の教師を見るより外はない。教師と十分の談話もせずに學校を見たりとて、何にも分るものでない。視學とか、參觀とか云ふものも、少し調子を變へるやうになれば善いかと思はれる。

◎大學を官吏養成所にしては成らぬなどゝ慷慨したとが一時は行れたが、夫は攻擊する方が無理で、官立學校は官吏を作るやうになるのが當然だと思つて居たが、近頃では、餘り其の攻擊も聞えぬやうになつた。スルト、近來はちと、私立學校の賛成者が殖えて來たやうだが、私立學校の設備を五年や十年で完備しやうと思ふのは、事躰を辯へぬとだ。己が信用してくれと言つたつて、誰が信用するものか。十年二十年の苦辛を積まないで、公衆の信用を得やうと云ふのは、横着の話だ。ツマリ、私立學校と云ふものは、官立學校よりも大きくなり、又確かになるべき性質のものではあるが、扨て愈よ其やうになるには、少くも三十年以上立たねば成らぬ。十年に一時勢變遷し、三十年に一時代變革する。其間に屹然として衆の信用を受るに耐ふるからこそ、其の結果があるのだ。既に將來に此の抱負があるならば、十年十五年は安んじて徐々進歩すべき筈のものであるが、其忍耐は六かしいものと見え

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る。何んでも、成り立つてから驚ろくのが、人の癖で、其途行にあるうちは、餘り人が注意しない、至極、微々たるものだ。然し、物は追々大きくなつて知らぬ間にコンナになつたかと思ふやうになるのが、事の成長と云ふもので、左様でなければ、發達に無理がある。無理があれば、つまりは遣り返しとなるので、何も不思議はない。

◎之からの學問の流行は、支那風に、魯士亞風で、兩國の國語は定めし大はやりであらう。漢學者も亦た、息氣を吹かへさるゝとであらう。どうも、いつ迄も、流行々々で、後進國の悲しさ、如何とも仕方が無い。西洋では英語、東洋では日本語と云ふやうに、どうか成らせたいものだ。

◎桑港や、バンクーバーの邊に居る出稼の日本人で、二三年も辛棒して二三千圓の金を握つて歸へるものは殆んど、江州人に限るやうださうだ。大坂でも、東京でも、確かな大きな商人と言へば、第一に指を近江ものに屈すると云ふ。此の氣風の出處を考へると、矢張り教育の結果である。薩摩、長州、土佐、肥前、又は、名古屋、加州、秋田、米澤、仙台、と云ふやうに、一々、國人の氣風の由て來る所を考へると、矢張り教育の結果だ。もし、教育と云ふものを、學校の内に限つて考へると、教育と云ふものは如何にも狹いもので、其の結果も亦た微々たるものであるが、國土、山川、組織、交通、氣風、學舍等の經營によつて、土地の人心を善導する工合を考へ、廣義の教育を施して普く廣く大きく之を薫化するとを工夫すれば、人は久しき間に如何やうにも變るものである。教育者としての抱負は茲にあるので、微々たる一學校の内に限られては居らぬ筈だ。然し一學校を空にするのでもなく、即はち、此處から發して斯る廣義の見識と、利導と、監督とがあるべきだ。苟くも一國の文相たるものは、即はち、此に着眼すべきで、學校の處置位の事に拘泥すべきで無い。又、如何なる教育者も無冠の文相たるべき覺悟で、抱負は、一代一國に渉るべきである。此の見地より學校の事を見なければ、教育と云ふものも、至つて狹いものとなる。其の任ずるとも、甚だ小さくなる。將來の國民たる少年男女の一生を預かるべき人の氣慨は、左様に卑屈して居るべきものであるまい。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

隨　感

○愚夫愚婦の心

政治は、愚夫愚婦の心に納得せんことを望み、宗教は、衆生凡夫の願ひに適中せんことを要す。旨として、理窟に掛念し、只管ら學者流義の講究に拘づらはんほどは、未だ能く政教實地の要緊に中らざるものと知るべし。小野梓、福田行誡に參し、歸りて後ち嗟歎して曰く、嗚呼もし此人をして政治家たらしめば如何にと。われ曾て小野氏を見ざりしと雖ども、此の一語を聞きて、夙に其の識見を凡ならずとせり。夫れ、政敎の事のみ只だ然るにあらず、敎育の道も亦之に同じ。若し能く、眼中一丁字なき俗物をすら感激せしむることを得ば、則わち其薫化偉なりと言はん。夫れ、珍奇異樣の理論を用ひて漸やく人耳を驚ろかさんとする如きは、黄口未熟の徒の屢ば爲す所なり。凡そ、老巧成達の士は斯の如くせじ。其の言行大率ね平凡、其跡太だ自然。蓋し是れ堂に上りて室に入り、以て妙地に安住する人の態狀なる歟。

○信仰告白と云ふことを奇しむ

吾が信仰は云々なりなど明白に言明して扨て得意氣なる人こそ心得ね。何如に達辯修辭の才あらしむとも、吾が生命となれるほどの信仰を言ひ盡し得なんものはあらじと思ふ。もし有りと言はば、われは反つて其の信仰なるものを不審とし、これ大方は信仰にあらじ、只だ一片の理論ならめと推了せんとはする也。古しへにありて信仰を告白せし族もありといへど、只だ是れ傳道一時の論辯にして、難者に對し止むことを得ず其の大躰を示したるに過ぎず。左なくんば、同門互ひに爭ひて師の說を狹くしたる忌まわしき理窟に外ならず。今の人の只だ一概に信仰告白を善き事と思ふに異なる。夫れ、信仰は生命なり。もし眞に自得して之を躰せば、奈何んぞ能く之を分條列擧の姿にして言明することを得んや。機に觸れて之に答ふ、疑ひに對して之に解く、事に臨みて其の一隅を示す、人の感ひをあわれに感じて如何んともして之を慰さめんとする隨時百樣の立說比喩なんどの外は、固より當に事を好みて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の信仰告白などはあらざるべき也。

○主義上の分爭

主義の爭には奮鬪すべし、何んぞ寛容雅懷の名の下に、義を見る眼の圖鹵緩漫なるを隱さんとするかと言ふ。此の言語は無論殊勝なり。但だ夫れ眞とに主義の爭ひするものは、實地を見る、空なる言語に於てせず、即はち是れ主義の爭ひの面目なれば也。言葉の上に主義を同する理論を唱ふるとも、心術の實地之に反するものあらば、苟しくも主義を爭そふものは之を假さず。即はち是れ嚴然たる精神上の戰ひなれば也。今の同主義の人とは、大抵、空論を同うするの人を言ふ、豈に之を主義と稱すべけんや。夫れ、實踐躬行の苦き修練を忽諸にするものは、但だ人の言語に於て其義を覺らんとす、實際を重んずるもの丶爲ざる所なり。心術陋劣にして、覇氣、野心に滿ち、黨を作り、分爭を事として、只だ一種の旗下を集めんとするの徒輩が、聖なる主義の名の下に空論を唱ふるほど醜くきはあらず。試みに問へ、其の重んずるてふ主義なるもの丶實際は何如なるものぞと。

(二八三)

○裁判する莫れ

世に責むべきものありとせば、只だ暴りに人をのみ責むるとを爲す無情の徒なるべし。然るに、これすら、其の識見の小にして、物に臆病なるより、些細の事に驚ろきて自から護らんとする不憫の胸中より出るものと考ふれば、これも亦た嚴しく責めべきものにあらず。人間本來、誰をか咎め、誰をか責めん。皇天を仰ぎて、吾身の不束なるを感じ、人類の惣べて白痴に等しき弱點を看破し得ば、黑白の必ずしも分らず、善惡の必らずしも差はざるを感じて、渾然たる一視同仁の聖覺を了悟せん歟。論者或ひは大慈大悲の人の敎語を疑ひて、其の善惡を混同するとを非とするの說あり。斯の如きは、其人未だ慈愛の等段を上らずして自から其感覺を經驗せざるとを自白するに同じ。蓋し、善惡の差別を無みするとは、慈愛の情に於て言ふ、哲理の論に於て言ふにあらず。俗士は利に悟り、論士は論に覺る、直ちに宗敎の靈に覺せざるは一の耻辱に非ずや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜　録

情死の哀を想ふ（下）

花　影　子

平野の櫻も青葉になりて、北野の梅の實目にたつ頃、親思には似ぬ無分別さ、其あたりに歎はれし遊女ありき。男は惜からぬ生命を長らへて、唯遠に殺してさ醫師に願ひつゝ呻吟せしと聞しが、今はいかになれりとも知れど、變り易きは人の心。幾年月の末はいかにとも計り得れば、哀はひとり女の上に止りぬ。丹波の山地に生れしとか、家貧くて此度は二回目の變勤、父の病の爲なりとも哀かなし。齢もはや三十路に近き殘の花、いかばかり露重く置きやしつらん。かつ親を思ふの心深く、父の病の癒されんとを神佛に祈りて、日々水垢離をなし斷ち物までもなせしとぞ。かゝる性質こそ、かゝる境遇に在りては最も不幸なる者なれ。世には己の如き薄命の女等を夜毎玩びて、捨るが如き黄金もあるに、かくまで思ふ父の病を治すべき藥の代さへあらで、身を賣りしと思へば、浮世がなしく又怨めしくありしならん。我身が胸にいかばかりの惱を包むとも知らで、思沈める樣で可愛きなど、たはれ男の語、うたて〳〵涙は胸に溢れども、顔には笑みを匂はせて、口になまめく節も歌はざるを得ず。離さして父の病に侍し難く、老いたる母が朝々の心づかひ、身の勞もさこそと思やれば、客なき夜半の五月雨、いかに寂しかりけん。夜も熟睡せずしてあるならん母を思へば、身に錦を飾りて、紅閨に蝴蝶を抱くはいかばかり苦しかりけん。昨日は梅、今日は桃と、移りゆく浮男の心には、己が如き色あせそめし姥櫻は、一時の詠めとはなされんも、庭に移して百年の末もと契る人はあらず。かくて世の賴みがたく、人の心のつれなきを知りては、たとひ表面には心なき樣を粧ふとも、すれた世の人我につらければ我も又と、自ら身を投出しても、いづこにか誠あれかし、誰にか情あれかしと、女心の遣瀨なき思、事に觸れ物にあたりて起りつゝ、なほ行末を思へば心細さも添はりて、賴むべき人もがなと祈るは免れぬ所なりしならん。

同じ泉の水分れて、花の園にも田畠にも流入る如く、親に對する眞心は又男を戀ふる誠なり。此女にして何の無分別と世の人は誹れど、我には此女なればこそ此悲慘の終をなしたれと思はる。既に燃ゆるが如き熱情を有して、世の味氣なきを感じ、行末の果敢きを思ひ、猶種々の悲しき思に惱みて、誠と實情を求むるの念堪へ難き時に、汝が爲には生命も惜しからじと慕ひ寄られては、何人かよく身を捧げずに居らるべき。まして此里のならひとて、逢ふにも儘ならぬ境界。思の募るも怪むに足らず。金錢に買はるゝ身の悲しさは、思はぬ人には逢ひ易く、互に心を與へし身には却て逢び難きと多し。されば行末を契りて逢ふ日を少からしめんとするも、女は自由なる郎の心の若しやと氣づかはれ、男も逢ふ人多き女をいつ變りもやせんと、互に一日も離れ難く、燃ゆる思の愈々燃えて、いつしか逢瀨のますが に窮し、父兄は子弟の身を慮りて男を控へ、樓主は貧き者に要なければ二人の間を堰かんとす。是等の事皆此世の常にて、いづれ咎むるも詮なけれど、玆に至りて二人の悲懃は望を此世に絕ちて、遂に來る世を契るに至れり。元來孝心深き女の是迄に思ひつめし心の中、我は思ひやる毎に袖の濡るを覺ゆ。唯だ我は願ふ殘りし男の心、終生變ることなく、たとへ新に妻を娶るとも忘るゝことなく、彼女に盡す赤心を以て其妻を愛し、共に亡き跡を弔はゞ彼女喜で瞑せんか。

人の心は不思議なる者にて、幾度か情に失敗し、重ねて人に欺かれ、遂に人の賴み難く世の僞多きを知るや、猜疑の念常に絕えず、偽誠實の友ありとも容易に信ぜず。然も此世に情あり、誠ある人のあれかしと願ふや愈々切なり。故にかゝる不幸の人は外見甚だ冷淡なるが如く、又一種執拗の性あるが如くなれど、其胸の奥には炎々たる情火滅することなく、賴み難き浮世に賴みをかけ、誠なき人の間に情を探る。かの僞多く、誠少きを最も感ずる遊女の如きは特に然り、彼等は自ら知らずとも、心のいづこにか此飽き足らぬ思を抱くべし。是は情ある父母兄弟を有する者にてもなほ免れず、況や父母なく兄弟なき者、或はありとも唯私慾に沈湎して、子女を自己が私慾の喰物となす者に於てをや。かゝる境遇に在る女の哀は、またと世にある可らず。彼等は浮む瀨のなき絕望の淵に沈み果て、如何に煩悶するとも遁れ難く、唯自暴自棄して、女性の優しさも人の本心も打捨て、あ

らゆる手段を用ゐて虚僞輕薄を逞うし、唯眼前の快樂を追求して、身の行末のいかになるべきかを勉めて忘れんとするか、然らざれば一日も速に死出の山路に逃れんのみ。たとへ身を持崩して輕薄を極むるとも、寄なき秋の夜半、しめやかなる村雨を獨寐の枕に聞くとき、或は悲しき夢さめて、すきまの風に孤燈の動くを眺むる時、思はじと思ひし身の上忍ばれて、心細くもまた味氣なくも思はれて袂を絞るにつれて、切に情ある人戀しく、苦し世に我身をいつまでも捨ざる人あらば、生命も何のものかはと思ふも、たゞ女氣の弱きのみにはあらじ。されば一朝かゝる男子に逢ふや、唯偕に死なんとを望むに至る。是をしも面白き者の如くに書きつられ、戯の如くに語りて、笑草となす人の心は、我是を何といふべきかを知らず。

あはれにこそと例の調を以て、新聞紙上に弔はるゝ(?)者多き今年はいかなる年ぞ。稲荷の山奥に心弱き男を殘して、ひとり逝し藝妓より、大堰川にうたかたと消えし二人に至るまで、幾度か肚膓ならぬ者にも洛陽の空に血を吐く思をなさしめぬ。

此事ありし後數日友どちと打つれて稲荷の山に遊びしが、兼ての願かなひし嬉さ、かつは社の神への禮にまでと、其日山に來りし人毎に菓子を贈りし若き女ありき。風姿に依りて、其身の上も願の何たるやも推察せられ、其ほゝゑむ顔を見るにつけても、彼の女が最期のさま思出されぬ。

偕に彼世までもと契りつゝ、此山に來りて心弱き情人を勵し、死ぬるはかくよと先づおのれと咽喉を貫き、猶ほこひしき人の手に依りて死せんとを求め、終に其膝に倚りつゝ瞑目せしを、其戀人は何事ぞ、僅の苦痛に心迷れて獨り殘れり、逝し者不幸なるか、殘りし者幸なるか、かの女今や情人の不實を怨むか、將た心よはき男の常と赦して、なほ思を替へざるかと、種々に思亂れて我は唯胸にあまれわ悲を手向となして過ぬ。路傍に茂る熊笹の間に、咲けるも優しき白百合の花、あはれ彼女の俤を忍ばせて今も涙の種となりぬ。

青葉の影に緑を添ふる大井川、昔の哀を深く止めし千鳥の淵を溯りて、世を捨てゝ却て情を捨ざりし詩人が、花の山二町登ればと詠みし大悲閣より、なほ深く分入り、名も清き清瀧川落合ふ處、淵は永遠の碧を湛へ、聳ゆる絶壁は倒るが如く、磊々たる怪石嵯峨たる奇巖、自から仙座を造る。此處には此世の傷ましき消息も至らぬとて、かつて友と偕に釣を垂れ、流に浴して天然の慈愛を謝せしに、星の逢瀬もありと聞く七夕の七日前、末遂げ難き戀に惱みし二人が此處の流に水泡と消えしより、今はなかなか涙を誘ふしらべを歌ふ心地せり。

貧は罪ならぬに何故に其報のかくは殘酷なる、ひたすら遁れんとあせりても災禍免れ難く、唯是のみなりせば、猶悲みのうちにも忍ぶべきよすがもあらんに、心にもなき罪惡をさへ犯すに至るは、嗚呼いかなる薄命の身の上ぞや、大井川の水に花の姿を委せし女も此哀に漏れぬものなりき。早く父母を失ひて、貧き祖母の手に育ち、骨あらはなる脊に負はれて、日々花の木陰に砂漠を隙す、祇園のほとりを彷徨ひつゝ、果敢き榮華の殘物に、二人が細き玉の緒をつなぎ居りしに、幸か不幸か、行末望ある蕾なりとて今の母に貰ひ取られし其時に、早く今年の哀の種は蒔れぬ。

三度まで戀の神に身を捧しといふ濃き情をもち、たとへ一人の叔父ありしとて、親もなく兄弟もなき身、末は唯だ己が腹を肥さんとの情なき情に養はれては、いかばかり心寂しく、物足らぬ思やしけん。小雨そぼふる夕暮に、親を慕ひて泣く猫兒の聲に、涙は廣き袖にも包みあまりしを、幾度なりけん。友なる少女等が樂しとて誘ひし芝居見に、父母に阿波の鳴門の波荒き世を、なきつゝさまよふお鶴のあはれさも、我身の上にひきあてゝ、見るに堪へぬ心地やしけん。斯くして實なき情の花園に幾度か望を失ひ、多情多恨の性には堪へ難きまで人戀しくやありつらんも、唯今日の盛りに色香を貪り、暫時露にゑひて明日は何處の花に宿るとも知れぬ、浮れ胡蝶の人心飽足らず、其上養母は傾く月の更けたる年をも思はず、寫る影さへ定めなき水心、家に波風立ぬ日なければ、面白からぬ思の加はりて、三十路に近くなりゆく年波の寄する毎に、行末の道も覺束なく、賴む木陰の慕はしかりしに、變らぬ契千代までと、表裏なき誠に逢ひて、今まで湧き兼し情の泉一時に溢れ、堰かたき思川絶えぬ逢瀬のをし鳥、行末はつがひ離れぬ妹脊と樂み待し甲斐なくて、男の父兄は此契を許さず。元より堅氣の父兄が是を許さぬも道理なれど、彼女に取りては終生の幸となるべき此契、濁江の流を出て、清きホームの庭に入るべき願も、今は水草の根を斷ちて、行へも知れぬ涙の川に流れぬ。生命となせる戀の糸を切りて、幸なき浮世にながらへてもいかにせん、たとへ二人の玉の緒を斷つとも、緣の糸だに固く結ばれてあればと、此世の名殘に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

暫時妹背の語ひを樂みて、心おきなく果てしなき旅路に登らんと、小督の昔を忍ばしむる、松のしらべ絶えせず、秋風に惱まされし小萩が袖の露、いまもこぼるゝ嵯峨の山里を過て、河鹿の聲もうら悲き夕暮に、清瀧の里に宿しぬ。初めて逢ひし夜半の雨昔も思ひ出さしむる流に枕して、暫時うたゝ寐の夢醒やすき世を、いまは門出と心靜に身つくろひ、故意と一人づゝ宿を立出て、細き岨路を過る折しも、親しき舞姫に逢ひければ、餘所ながら別を告げて分行く路の邊に、姫百合撫子などのうなだれて、おきあまる白露に同じ身の上と、袂を濡し、虫の鳴音細き夏草の茂みを見ても、草葉の蔭にさきゝし父母の戀しく、今宵のうちに夫婦手を取りて、まみえまゐらせんと心のうちに念じつゝ、彼處に至れば、男は先に來りて待居りぬ。嗚呼此時の二人の心、いかに悲しく樂しかりけん、語もなくて堅く相抱き、波たつ胸を互に寄せて、いつまでもかくてと二人の身を縛り、思も通ふ兩手を互の頸にまとひて、心も深くありげの流に身をば投じぬ。

翌日に至りて二人の遺書家に達し、始めて驚きし一家の者は、取る物も取りあへず彼川邊に至り、空く亡骸に涙を濺ぎて、返らぬ事を幾度か悔いぬ。生ては唯一の望を失ひ、死して後のみ空く喚るとは浮世の常なれども、是が常なる浮世ぞ怨しき。嗚呼父母の前に永遠を契る彼等は樂きや否や、牛夜虫の聲細き庭に立ち出て、かの蒼穹を仰ぎて我は限なき思に惱めり。

無教育なる者は往々生命の價値を知らず、隨て其爲す處思慮なきを免れず。されど或逆境に於ては、敎育、却て人を絶望に陷らしむる魔力となる。

名も大淀さて、流に浮沈する小女ありき。糸竹のすさびより婦人普通の教育を受け、なほ或女學校に一二年の星霜を送り、異る文の林にも分入りて、女の道の奥深く迴りたる身の、父が一朝の失敗に浮世の荒波凌ぎ難く、惱める一家の爲斯くなり果しとさて、その味氣なく又悲しかりしといかばかりなりけん。子女は兩親の奴なるが如く思ひし、昔の教に育てられたる身なりせば、せめて諦むるよすがもありたらんに、如何なる理由のありとても女の道を破るまじきなど、教へられたる身に、特更に恥かしくいかばかり身の薄命に袖や濡れけん。昔の友の今は人の妻ともなり、母ともなりて、美しき家庭に花を咲かせ、泉をなせるを、我身の上に比していかに感じつらん。我身も世に在らばなど思出さるゝ時、優しき心に堪へ難き心地もしたるならん。殊に親しかりし友どちも、今の我身を賤めてか、一

度の消息も寄せず、せめては盡ぬ涙を袖に受けてよと願ひても、それさへ今はかなへ難く、頼の糸切れて沈み行く身の末心細く、加ふるに教の庭に育ちし眞心の感じ易く、隨て恥しさ苦しさも一層深く、人のうかるゝ春も外にして、身にしむ秋は特更に淋しく、或は强て浮れ騷ぎて暫時憂身を忘れんとしても、時雨する夜の寐覺かなしく枕の紙の乾ぬとのみ多かりつらん。更に口惜きは名こそ同じかられ、實際情をひさぐに於てかはりなき歌妓は、自己に比して一層輕薄に、一層品性の劣れる者も、世は是を賤めざるのみか、却て竊に尊重し、いかなる高貴の社會にも交はり得るが故に、隨て苦海を脱するも容易にして、かつ一旦身を家庭に移せば、忽ち世は昔の身の上を忘れし如く、普通の交際を爲すに何の憚なし。斯る事など思へば一層幸なき身の上悲しく此世はさこそ怨めしくなりたらめ。されば一度耶の眞心に逢ひて嬉しさ遣る方なく、一夜逢はざれば生くるも甲斐なき心地せしならん。殊に耶は大學をも終へし身、自己も教ある身なれば互の思やりも一層深く、思を解するとも精しければ、常の戀よりも情は優りて濃かなりしならん。されば例へかくせば二人の行末いかになるかと心づかぬにはあられど、唯たのみ少き身の悲しさには、戀しといふ思のみつのれば、耶も哀の愈々身にしみて捨て難く、偕に高き教を受けし身にて殘る浮名も厭はず、終に明け易き夜半の露と消えぬ。

野邊の白露は見るまに消え、盛の花は忽に散る。生きとし生ける者、かの暗黑を出て此幽冥に沒す、死の不思議なるは元よりなれど、未だ生の測知し難きには及ばざるべし。人は何處より又何故に此世に生れ來らざる可らざるか、運命の手は何故に此人に優しくして彼人にはつらきか、或は生れながらにして貧に苦む者あるに、富貴に樂しき夢を結ぶ者あり。要なしと思ふ生命の長きをかこつもあれば、惜む我世の短きを嘆くもあり。善惡邪正混入錯雜して、應報あるが如く又無きが如し。心直くとも、智乏しく力足ざれば、忽ち猛獸毒蛇の如き强者の食物となり、奸猾邪智の輩は常に社會の上層に飛翔して、好運の空氣亦常に彼等の翼を助く。四海同胞萬民一家たるを望みて、かの神聖なる最高の理想に向て進む人なきにあられど、滔々たる擧世の人、かの哲學者を以て自任する者に至る迄、强者の權利を主張して自然陶汰の理を誇貌に說く。利己主義を中心の世には、唯利害の外計るに遑なく、道義を利害の犧牲となす者を智者と稱し、理想の爲に名譽利慾

を貴ぶ者を見て嘲り思ひ罵るの是故に彼等が主張する所の德義も亦方便的にして、盡く利害の上より打算したる者に外ならず。彼等が最高の眞理と……

時私慾の狂炎をしづめて、……

を擲つ者を迂と嘲り愚と罵る。是故に彼等が主張する所の德義も亦方便的にして、盡く利害の上より打算したる者に外ならず。

彼等が最高の眞理として、尊崇する優勝劣敗の如きは、無心無情の世界に於ては或は眞なるべしと雖、未だ以て理想を有し、道義の大法を遵奉する人世の眞理とはなし難し。實此理は宇宙の一事實(ファクト)なるべきも、決して是を以て眞理(ツルース)となすは、吾が首肯し難き所なり。鄙哉今の人、徒に自然の事實に默從して、却て是を支配せんとを願はず、自ら萬物の靈長と稱し、神の子と唱ふる者にして、猶此運命の羈中に安ぜんとす。されど幸にして古來聖人なる者ありて、彼の神性に通ずる理想を示して、此羈束を脱せしめんとせり。人間元より此運命に安ずべき者にあらざれば、いつかは運命の手を離れて、所謂自然法の上に超然たらんと欲す。然るに嘆ずべきは、古來我東洋の天地は、一種の宿命説の暗中に葬られて出るに難く、爲に幾多貴重なる身心の死に陷りしや知るべからず。我邦人が口癖なる諦ろてふ語にして、もし分に安じて既往を咎めず、人を恨みず、新しき希望に向て進むの謂たらしめば、是實に貴重すべき事たれども、佛教の因果輪轉の說、是をして一種の絕望的自屈心とならしめ、精神上に於ける不屈不撓の進歩を阻止するに至れり。我國民の短氣小量にして、生を輕ずるも大に是に宿因す、無教育の社會に於て特に甚しとなす。かの不運に逢ひて墮落する人々、いづれか此自暴自棄の助に依らざる者あらんや。憐むべき彼の姉妹等、又多く此渦中に在りて自ら知ず、唯一身の不幸を悲で、底なき淵に沈みゆく者多し。嗚呼此間にありてなほ能く彼等に望を與へしめ、心靈の死を免れしむる者は何ぞや、あゝ神よ、是れ人性自然の愛なるを謝す。

世人は名譽の奴隸を英雄と呼び、利害に銳敏なる者を智者と稱して、然も戀に熱する者を罵りて痴狂となす。痴か狂か我は其罵るに委すといへども、少しく世人が何故に彼を揚て是を貶せんとするか、自ら熟考せんとを欲す。名利果してしかく尊重すべき者なるか、成否を慮て事を爲す、果して人の道なるか。榮華は朝顔の花凋み易く、名譽はおける露の忽ちに消ゆ、まして根なき蔓に咲し花、是に結べる露のはかなきをや。濫に私心を充さんが爲に、萬人の血と淚とを絞りて顧ざる者、揚々として社會に睥睨し、小人是に阿諛し、貧者是を羨望すといへども、是をかの暗黑の裏面より觀察すれば、呪詛の燒點、怨恨の集る所たり。されば暫時私慾の狂炎をしづめて、默思瞑想する所あらば、必ず悚然として全肌に粟生ずるの感あるべし。然も其心の耳目を閉て益々奢肆驕暴を逞うし、虛僞陰險、巧に僞善を粧ふて天下を欺かんとする者あり、正義の靈いかに憤り給ふならんか。那翁歷山の大業、グールド、ロスチャイルドの豪富、彼等いかに自傲し、擧世是に心醉すとも、若其内に一點の至誠と博愛と無くむば、徒に聖賢の憫笑を買はんのみ。いつかは盡滅すべき此地上に、僅五十年の束の間、如何に大業偉勳を成せしを誇るも、必竟一の徒勞に過ざるのみ、砂上の文字、水上の波紋と何の異る處あらんや。かの生命を現世に限りて、而もなほ事業は神聖なり、快樂は最も貴重なりとなす者の心事、我怪まざらんと欲するも得べからざる處なり。彼等は或一種の反動より、强てかゝる事を唱ふるか、然らざれば唯私慾に眩惑して、少しも人世を眞面目に考へざる者ならんのみ。

最高の道德は無意識にあり、即ち意識を經過して、其上に超越したる無意識にあり、寧ろ超意識といはん方勝れるやも知れず(決して意識なきにあらず)。古來多の哲學者間には、此無意識的道德を唱へし者少からざれども、往々意識を生ぜざる時の無意識(生れしまゝの嬰兒の如き)を誤りて混合する者あり。獨基督は全く此弊を脫出して、誤謬なき最高の道德を示しぬ。愛は元始の無意識より最高の無意識に貫通す、愛の中に法律なしといふは即ち是故なり。或は基督我に在て活るなりといひ、基督の愛我を勵せりといひ、或は彼に依りて生命を得しむといふ、是皆愛の化身なる人の子を通じて、始て神を識りて、永遠の生命に入るを云なり。無意にして而して德を全する大自在の妙境に逍遙するは、即ち玆にあり。されば人世の價値は永遠無朽の靈性を信じて、父の完全きが如く全かれと救主のいひ給し如く、人類の父にして又最高の理想たる絕對者に向て進み、われ人皆に神の子たる本性を全うするに於てあらざるか。されば世に在て此目的の爲に一身を供するは、實に必生の美事ならずや。

神の御心は眞に奥妙にして、自己を忘れて人の爲に盡す者は自ら其品性神に近く、無意にして而て能く人性の兩面を調和し、いつしか自己の靈性を完うす。人其友の爲に生命を捨る是より大なる愛はなし、人世の美妙、玆に至て極まれりといふも敢て不可なきなり。然るにかの私慾にのみ敏き智者、名譽を博するに巧なる賢人、倫理宗教の講義を好む道德家が、戀に一身を捐る男女を嘲りて無分別とな

し不道德なりとなすは嗚呼それ何の心ぞや。我は却て彼の悟貌なる多くの宗教家よりも、彼等が迷の極として、嘲笑する無分別者を以て、遙に悟りたる者と思惟せざるを得ざるなり。

あゝ麗しきは戀なる哉、美術家と自稱する者さへ名利の奴となりて、富豪貴顯の門にのみ出入して、ひたすら其技藝を賣らんとする中に、無學の匹夫、狹斜の賤婦をしてなほ能く互に其生命を與へて惜ざらしむ。此戀のうるはしさ、嗚呼我是を何に譬へん、我はイスラエルの詩仙と偕に「大水も消すと能はず、洪水も溺すと能はず、人その家の一切の物を盡く與へて換んとすともなほ賤めらるべし、」と、是をたゝへてなほ及ばざるを恐るゝ者なり。紅紫の寶玉も以て購ふに足らず、精金も以て買ふに足ざるなり。互に自己を忘れて人を思ひ、思ひ思ひて夢にも現にも唯其人忘れ難く、いとも苦しき樂みに死ぬるが如き心地する時、あゝ何ぞ其心のうるはしくして純なるや。

嗚呼尊き哉情死や、道德さへ唯乾燥無味にして、義務といひ責任といひ、かくせざる可らざるが故にかく爲し、かくすべからざるが故にかくせずと、愈々出て愈々不自然なる間に、無慾にして至誠を盡し、互に犧牲となりて顧ざらしむ。汝はかの悟貌なる道德家宗教家等が、夢にも味ひ難き妙境に、濁江に浮沈する浮萍の身をさへ、永遠の花を開かしむ。世の道德家宗教家等に、自ら勉めてかく爲し得たりと、揚々として自得し、彼パリサイ人の如く人の前に喇叭を吹かしむるものに、最も墮落せりと稱せらるゝ婦人も、なほ生命を人に與へて少しも思はず。右の手をして嘗て左のなせし事を知らしめず。然も哀にもかの僞善なる學者とパリサイの人とに擯斥せられて、自ら賤しき者と信ぜり。あゝかく信ずるは豈一人のマグダラのマリヤのみならんや、罪人の友たる人の子、今此世に在さば、彼女の如く嘉せらるゝ者、蓋少からざるべし。云勿れ遊女の情は變じ易しと、變じ易きは女性の常にして、獨彼等のみにあらず、戀愛の神聖を口にする我儕が間にも、些細の事情に依りて、約を變ずる者少からざるにあらずや。我は寧ろ彼等の間に少許なりとも、眞情の現はるゝを喜ばんのみ。長く輕薄と虛僞との間に住みて、淫男の誠なきを知れる者なれば、始は郎が姿の花に醉ひて、暫時色香に戯れんとせしも、一度郎に實情あるを見るや、情の綱に縛りて苦海を出んと欲し、漸く實を盡して郎の心を失はざらんとを勉るに至る。是れやがて郎をして愈々情を運ばしめ、勝を盡さしむるの媒となりて、離る能はざる契の本となる。かくていつしか色香も戯れも打忘れて、今の憂身より救はれんとの願だに、又念頭に置ざるに至れば、あゝ唯戀あるのみ、至誠あるのみ、良家の處女と、狹斜の妓婦と何の異る所あらんや。却て多く世の風波を凌しが爲、是の彼にまさりて一層深き誠を有し、極めて消し難き情熱を有するのみ。

生命は重ずべくして濫に捨つ可らず、肉身は靈の宮殿なれば、靈の尊きを知る者は愈々是を貴むべきなり。然も此世に於ては未だ身靈二界の調和全からざるが故に、往々二者の間に衝突を來す。かゝる場合に處して人たる者の務として、其肉身を擲て心靈の生命を受けざるべからざるとあり。されば死は必しも死にあらず、死して而て始て生るとあり。嗚呼多情多恨の友よ、卿等の死を以て無分別となし、擧世是を嘲笑罵詈するとも意とすると勿れ。あゝ苦海に浮沈する姉妹よ、清濁は心にありて肉身にあらず、卿等が郎に對するの情にして、もし終世變ずるとなくば、何の恥る處あらんや、恥づべきは輕薄にあり、卿等はかの歐妓が身の上を羨むか、幸福は榮華にあらず、富貴にあらず、實情なき人と偕に金殿玉樓に住んより、寧ろ誠の燃ゆる胸に寄りて死するは幸福にあらざるか。恐るべきは自暴自棄にあり、諦るにあり、我身は汚れて到底清き者たる能はず、我心を賤くして到底貴き者たる能はずと、自ら道義に對して絶望するにあり。絶望は心靈の死なり、心死して而て身猶活くとも何の幸かあらん、浮薄にして誠なき者となりて生んより、寧ろ悲戀の犧牲となりて死するにしかず。情死や玆に於て解脫となり、更生となり、永遠の生命となる。あゝ多情多恨の友よ、決して自ら卑めて塵中に埋る勿れ、寧ろ世の無情社會の不完全を怨みて、是に反抗すとも、必ず自屈して絶望の中に諦むる勿れ、潔く奮鬪して後、全く力竭くるの時には、速に戀の神に導れて汚泥の海を出よ。世の道德家宗教家等よ若卿等に一片の同情あらば。彼等の紅血盡く又卿等の與る處なるを思ひ、せめては眞面目なる心を以て彼等の死に對せんとを願ふ。

霞に消えゆく夕日花ににほひて、焔れる紫の春の夕暮、天地に溢る愛のうちに融けんとを欲し、星さへ稀なる大空に、透とほるばかりに清き明月の夜、滿渡りたる天然の縲に、一致せんとを願ふは詩人の戀情なり。我も浮世も、全く人の情に消去らんとを望むは、戀人の至情なり。その如月の望月の頃、花のもとにて死な

んことを願ひし聖僧の心も、郎の胸に縋りて死なんことを欲する小女の情も、同じ天地の愛に抱れて、その懐に眠らんと欲するに外ならず。あゝ天地の愛、至仁の父よ、願くばかの悲しき幸福に入りし兒等をして、とこしへに汝の暖き懐に住ましめよ。

故郷の夢

岩野泡鳴

越に住むてふ草蔭、
病の床にうち伏して、
月日の駒の足搔のみ
かき計へけり二十七日、

茲に僅に癒し身の
今朝早くより起き出て、
手に汲上る眞清水に
うつろふ面の影細み。

未だ筆をし取りがての
心ばかりは梓弓、
春の光に誘れて
隅田河原をうち渡り。

なかば綻ぶ梅屋敷、
諸葛はいづこ臥龍梅
木下の流の堤さへ、
足にまかせてさ迷ひつ。

友の家居しおとづれて、
すゞろ歩みのくたぶれを
炭櫃のそばに置き忘れ、
花のうはさに夜は更ぬ。

折しもあれ、烏羽玉の
夢の御神の忍びてや、
熟睡の魂をいそのかみ
わが故郷につれ行きし。

われはか青き麥畑
一筋路を横切りて、
隣人等の汲み馴し
井戸のかたへに出で來り。

稚き友が犬の子を
繩にゆはへてもて遊ぶ、
その中をしも過ぎ行て
枳殻の垣にかけ入つ。

花は咲けども山すげの
實ならぬ梅の鶯や、
來鳴く樹かげにもの洗ふ
母の御前をかしこみて。

わが家の軒に入りなんと
返り見すればこは如何に、
ありし昔の面影は
消て跡なき床の上。

あはれ、醒めては遠ざかる
かの世の人の音信や、
聞くによしなきやれ琴の
緒にのみつなぐわが命。

心と共に玉かつら、
絶ゆることなき天地の
かげに隠れてこの三歳、
わが身を守る母上よ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

たとひ浮世(うきよ)は花梅(はなうめ)の　實(み)ならぬためし多(おほ)けれど、
蹈(よ)み行(ゆ)く道(みち)し直(なほ)からば、　黄泉(よみ)の隔(へだて)も無(な)からまし

暮　春　　　　　　　　　　　　　　杜　子　美

臥レ病擁塞在二峽中一　瀟湘洞庭虛映レ空
楚天不レ斷四時雨　巫峽長吹萬里風
沙上草閣柳新暗　城邊野池蓮欲レ紅
暮春鴛鷺立二洲渚一　挾レ子翻飛還二一叢一

いざこさしちれささくらをかたらはん
　なか〳〵さらば風やをしむさ　　　　西　行

服裝と彩色

西　原　順（投書）

美の觀念發達せざる野蠻時代にありては極めて單純なる色を愛し、随て濃厚なるもの即ち赤紫等の色を用ふるを見る。其理由多々あるべしと雖、理學上の定則として赤色の如きは七色中屈折の度最も強く、人の眼目を刺戟すること甚しければ極めて人の目につき易く、漸く步行に堪へ、僅に片言交りの語を覺えて家庭の興味を添ゆる無心の幼兒も、黑白の言葉さへ知らぬうちに早や赤き着物を見れば、欣喜雀躍、人のもてるを欲しがり、己の衣裳を人に示して嬉しがる傾あり、是れ何の故ぞ。美の觀念未だ發達せずして偏に屈折の度の強きもの自然に眼中に映じ來るに外ならず。此時代にありても獨り女子にのみ限らず、幼男幼女何れも區別し難きに似たり。漸く長ずるに随て男女の嗜好に相違を生ずるも、婦人にありては格別の變化を見ざるは何ぞや、云迄もなく婦人はたしなみ深くして男子の麁暴無頓着なるに似ず、其天性として衣食住万般の事にあづかるを以て、殊に人の目につく衣服などには最も思を凝し、色合より縞柄に至る迄何くれとなく心配すれども其割合に美の觀念進步せざるは惜むべきなり。もとより男女の區別ある以上は嗜好に於ても相違あるべき筈なれど、比較的に女子の美術的眼光の幼稚なるは、思ふに女子の教育の普及せざるの致す所ならむか。近く其例を示さんに、市井町人の子女と女學生とを比べて觀察せよ、髮飾より衣服の色合、殊に赤色を用ふるの稀にして紅粉を施すことの少きを。倘一段下りて考れば坊間の子女と雖田舍娘と比ぶれば大なる相違あるを見るべし。彼等は田舍娘が赤い蹴出しに赤い切掛け斑々たる紅粉を粧て出るを笑ふにあらずや。是をは餘り、赤色を用ゐ過ぎたるが上にも色合の程を考へざるによる。勿論都人と雖赤色を用ゐざるにあられど、比較的に其調和の上手なる故に幾分か忍ふことを得べし。極言すれば赤色の如き濃きものは野蠻人の好むものにして猶幼稚たるを免れず。併し赤色と雖七色中の要素なれば強ちに擯斥すべきものにあられど、其色素の配合に至ては輕々に付す可らず。万綠叢中一點の紅何故に美なるか、南天の實の累々として珊瑚を聯ねたるが如く少しの厭味なきは何故なるか、大に研究を要すべき點ありて存するなり。

春の花多き中にも桃花を賞する人少くして梅花を愛する人多きも、こは春に先ちて開くと其淸香の馥郁たるとによるべけれど色彩の關係もまたあるべし。殊に櫻花に至ては万人歡呼して狂奔し、長き日を眺めくらしてあかぬ所以のもの、其色彩の梅花の如く淡泊にもあらず桃花の如く濃厚にもあらずして何となく人目に溫和なる感情を與ふるを以てなり。海棠は支那人の賞揚する所にして吾國人の櫻花に於けると一般なりと。さらば是に加ふるの形容詞なき筈なるも、雨になやめる海棠云々と小說家の陳套語に常用せらるゝは何故ぞ。是れ雨水の花に滴るときは、海棠の赤色其の雨水を通過して人目に映する迄にはその濃厚の色をして少く減せしめ、赤色の幾分水滴の爲めに調和せられて厭味なき麗しき色を呈するによるならむか。

凡て色の餘りに濃きもの強きもの、聲の餘り、尖きもの高きのはも、耳目の神經をして久しく亢張せしむるが爲めに之を疲勞せしむるの理なれば、色彩聲音共に其中和を取らざるべからず。人皆明月を愛して赫々たる天日を語らざるは何ぞ。是れ天日は餘りに光線の強くして朧月夜は明月を措て朧月夜を賞揚するは何ぞ。

明月より溫和なる感情を與ふればなり。同じき天日の中にありても旭日と夕陽と
が當題に入るも如何に、其理推して知るべし。

る者の、之を見ると、

明月より温和なる感情を與ふればなり。同じき天日の中にありても旭日と夕暉とが畫題に入るも如何に、其理推して知るべし。

赤色は人をして怒らしめ、靑色は人をして喜ばしむるとは、某ドクトルが十數年前の昔に述べられし說なるが、今尙腦裏に浸染して感伏に堪へざるもの、今日に至て益々其然るを信ず。是に於てか知る赤色もとより彩色中の最大要素なると同時に其不調和なるに於ては、凡ての色合を亂し、偏に厭味を生して嘔吐せんばかりなるに至る。一日上野向島の花盛なる處に立て數千の子女が盛粧せる樣を見たるに、さながら十軒店の雛人形にも似たり、是等のもの能くも一足にても步み來れるかと思へば不思議なり。綺羅隔々の頭中に高尙なる魂の潛み居るかと思へば、四千万の半を占めたる吾國の婦人にして斯くも美の觀念に乏しきかと思へば散る花よりもあはれに見ゆ。否獨り婦人のみを責むべきにあらず、東洋の美術國を以て自ら誇れる我國民は何ぞ大に顧みざる、予は今此問題に對して解け難きもの少なからず、僅に其一斑を綴りて大方の敎を乞はんと欲す。

時文

◉方丈記析義　鳥居忱著　大日本圖書出版會社出版

鴨長明の方丈記を註釋評解したるもの、近年に至りて數種出版せられたるが、今又鳥居氏に析義の著あり。其析義の法たる本文を部、區、段、章、節、目に逐次分析して、事の史實に關するものは、他書を引照し、また鼇頭には、思想の相似たる詩偶和歌を數多註したり。又其本文は、多くの異本につきて語句の多きに從ひたるものとぞ。要するに此析義たるや、學校の讀本としては、其餘に區分の多きが爲に、折角の名文も興味索如として、遂には書生をして玉語碎金を諳せしむるに等しきに了らんか。これを敎場又は机上の參考として用ゐるには其價値あり。終にいはん、此析義の文の形態例へは對語聯句の如きに苦心するに過ぎて、文字の排列を奇異に變搆したるは、果して長胤の志を得たるものか。由來、此文の如きは、長明が一時の感を述べたる隨筆に過ぎざるものなるに、今析義を加ふる者の、之を見ると、恰も俳諧(たとへば祭猫文)に於けるが如くするものは蓋し後進の文を學ぶ者を敎ふるの法に非らざるをなきか。

◎日本コート裁縫傳授書　小出新次郎著　大倉書店版

これは男女小兒などが學校行の服裝に適したる上着にして、雨よけにもよろし。形は上は筒袖にて下の袴の恰好なるは、至極面白き思ひ付きなりといふべし。

◎世界古今名婦鑑　蘆花生編　民友社版

これは兼て家庭雜誌に見えたる外國各婦人の傳記または家庭の逸事談などを一括したるものなり。佛國革命の花たるローラン夫人、ヴヰクトリア女皇、トルストイ家の家庭敎育ナイチンゲール孃、ジアンダーク、メレー、ライチン等を始めとし多くの記事紀傳あり、家庭に高尙純潔なる空氣を運ぶが爲めの讀本としては、實に好頁なるものなるべし。近來日本女傑傳書類の數々出でたるが、彼等とは異なり、此書の記述するが如きものは、一々興味に富みて而して人を敎へ、高尙なる精神を鼓吹するに大に力ありといふべし。

◎五三桐　春陽堂版

豐國祭と奠都三十年祭とに際しての新小說の臨時增刊なり。口繪には兩祭に因める種々の寫眞版を載せたり。四大庵の「五三桐」といへる豐公傳記は、太閤記などを本として、手短に書き流したるもの、正史として見るべからず。松葉の「瓢の露」は多少正史を考證して豐公逸事の少許を錄したり。

◎女學文壇雜俎（本誌〆切迄）

◎子供に獨立の氣象を養はしむる事（蘇峯生）　家庭雜誌第百十五號
◎我が女子の友　女子の友第二十號
◎朝鮮留學生の保護に就きて我が貴婦人社會に望む（鹿山）　女鑑第百五十四號
◎防長令女敎會の演說（赤松照幢）　長周日報四月十三日
◎富豪家自ら謹むべし　時事新報四月二十一日

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

◎女子高等學校令　近日の諸新聞紙傳へて曰く文部省にては近日女子高等學校令なるものを布かんとすと、我邦に於ては因襲の久しき未だ、男尊女卑は弊風を脱却せざるの結果、男女間の學識の程度に著しき不平均を生じ、男子は文明の教育を受けながら、女子にして、文明の教育を受くるものは實に稀にして、且亦女子に高等教育を授けんとするは、帝都にある一二と居留地に於ける外國人の設立せる宗教的女學校を除くの外、各府縣に在ては女子に高等の教育を授くるの學校は皆無の姿なるは常に世の識者の憂ふる所なるが、文部省に於ても過般來女子教育上に關し、種々調査せし結果愈〻女子教育の奬勵誘導方法等の取調も完了せるが故、近日中に女子高等學校令を發表する筈なりと云ふ、と。而してなほ後日の傳聞によればいよ〳〵同令は發布せらるべき有様にて該令制定の上は各府縣に女子高等學校一校宛を設置せしむる事となすべしといふ。之によりて見れば其女子高等學校といふは今の高等女學校の事なるが如し。記者の如きはこの噂を聞きて最初は高等女學校よりも一層高等なる女學校の出來る事にやと思ひたりしを。男子の高等學校に對する女子高等學校は即ち男子の尋常中學校よりも一層劣等のものなりとは、女子被教育の價値の見下げ居ればなるべし。而し又この令發布の理由として掲げ出すが如きものは、けだし新聞屋の　ひ前なるべし、マサカ文部省にてはかやうなる事理に暗き事はいふまじ。

◎ウイラード傳　フランセス、イー、ウイラードの爲めに二十一年間秘書の務を執りし、アンナ、ゴルトン孃は、此度ウイラード傳の著述に從事し、五万部を限り豫約を以て米國婦人矯風會出版部より出版せんとす。蓋しこの偉女傑の傳記中最も正しきを得たるものなるへし。

◎ウイラードの著述目錄　ウイラード女史は文藻に富みて述作少からざりしが、其一部の書籍として出版されしものは實に左の如し。

"Nineteen Beautiful Years."（十九年の生涯）

これは女史の初めての著述にして、其妹氏の一生涯を記したるものなり。詩人ホイッチヤーこれに詩を題せり。此書は數ケの國語に飜譯せられたり。

"How to win."（成効の秘決）

少女の讀み本なり。

"Woman and Temperance."（婦人と矯風事業）

婦人矯風會の歷史なり。

"A Classic Town."（學問の都市）

エヴァンストンの大學に關する記傳なり。

"A Young Woman Journalist."（女新聞記者）

女子に勸むるに新聞記者たらんことを以てするものなり。

"Glimpses of Fifty Years."（五十年の回顧）

ウイラードの自叙傳なり、一千八百八十九年、婦人矯風會の求めによりて著述し、賣高五万部なりき。

"A Great Mother."（大なる母）

母氏の贊傳なり、この書は實に女史一生の傑作なりといふ。

"Do Every Thing."（各事に任すへし）

これは婦人矯風會の運動に對する方針と訓戒とを委細に述べたり。

"Woman in Pulpit."（婦人言論の自由）

この書は往年佐々城豐壽氏之を飜譯して、我社より出版したり。

"How I Learned to Ride the Bicycle."（自轉車乘法）

"Occupations of Women."（女子の職業）

◎十年間の本邦米產額　明治二十一年より同三十年に至るまでの本邦米產額は左の如し。

明治二十一年	三千八百六十四万五千五百三十八石
同　二十二年	三千三百万七千五百六十六石
同　二十三年	四千三百三万七千八百九石
同　二十四年	三千八百十二万三千五百四十八石
同　二十五年	四千百三十七万八千四百七十四石
同　二十六年	三千七百十九万九千六百六十三石
同　二十七年	四千百八十六万三千七百二石
同　二十八年	三千九百九十二万〇八百八十二石
同　二十九年	三千六百十九万九千七百七十石
同　三十年	三千三百万千〇十五石

之れによりて見れば、昨年の收穫は十年以來の不作にして、金融必迫に加ふるにこの不作を以てす、米價今日の騰貴あるも止むを得ざるなり。

◎人間一日の食量　米平均三合とすれば一年の需要一石〇九升五合なり。而して本邦の人口今日にては四千万の以上に出づる多し、然れは內地產の米は以て國民の口を糊するに足らざるものなり。人口日々に繁殖して、米數年を追ふて不作の度を增す。

◎本年九十二歲　なる無病息才の老婆の長壽法を聞くに曰く、毎日三度の食事以外には决して間食せす、又食事は、もう一杯といふ處にて止める、如斯くすると年少の日より今日に至る迄毫も怠ることなく、爲に嘗て病氣に罹りたることなしと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎臺灣女學生二名　職本社長客臘渡臺の節、同地の官民有志家と計り、同地土人間に女子教育を布かんが爲先づ其準備として二三の女學生を伴ひ歸る筈なりしも故ありて果さゞりしが、此度いよ〳〵臺南バークレー女學校生徒吳笑(十二)黃鸞(十三)の二名は傳道師平山氏に伴はれ三月廿八日基隆を出發して出京の途に就き、目下豐前中津にありて日本語研究中、不日上京して明治女學校へ入學することなるべし。

◎愛媛縣の高等女學校補助規程　愛媛縣にては兼々高等女學校縣立の問題ありしも、其都合に運ばざりしが、此度縣會の贊助を得て知事は縣内三女學校以內一地方に一校を限り一年千五百圓以內の補助金を給して、之を受くる學校は凡て知事の監督下に在るべきことゝなせり。それにつき松山市の私立松山女學校及女子實業學校の二校の內後者は前者に比しては遙に微々として振はざるにも拘らず之に補助金を與ふることとなり、同校は名を改めて高等女學校となれり(同校は始めは愛媛縣高等女學校と稱したりしが維持困難なりしが爲實業學校と改め、今又舊名に復したるものといふ)なほまた同縣下には他に女學校として存在せざれば、規程中の三校中二校なるものは追々新設せらるゝことゝなるべきか。

◎受賞　岐阜縣羽島郡南宿村の平民近藤善九郎の妹たきと云へるは、本年五十二歲に至るまで獨身にて暮しつゝ十五年間一日の如く兩親に孝養を盡し、特に母の病に罹りて打臥すや、藥劑看護の勞を惜まざるは殊勝の至りなりとて、此ほど同縣知事は賞狀に金二圓を添へ下附したりと云ふ。

◎貞婦受賞　和歌山縣江馬正齋の母エイ、夫の工事に死せし後節を守りて寡居し老年の舅に仕へて至孝に、小姑を愛して一家和睦す、縣知事其孝貞を賞して木盃一組を賜ふ。

◎秋田那波氏の善行褒賞　昨年八月廿五日發兌本誌第四百四十八號に委細を錄したる感恩講の那波氏は此程左の通り其筋より受賞ありたり。

秋田縣秋田市川端三丁目

那波三郎右衛門

資性淳厚儉素家を治め精勵業を守る殊に父祖の遺緒を續て力を感恩講に竭し多く有志を誘て專ら慈惠を務む撤藩置縣に際し本講の原祿を公收せられ先世の貽謀將に廢絕せんとするを嘆し再三陳疏遂に之を挽回し爾來鋭意講資を增殖し軌範を紹述し奔走提奬益々普及を圖り講社を開設すること十三町村賑濟の業大に擧り管理の法愈々備はる賞恤其澤を享くる者幾んと三萬人私財を費す一萬四千圓に及ふ洵に公衆の利益を興し成績著明なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

明治三十一年三月十一日

奉　勅(大日本帝國賞勳局印)

賞勳局總裁正三位勳一等子爵　大給恒

秋田縣秋田市川端三丁目

那波三郎右衛門

祖父以來慈惠の事業に竭力し成績著明なるに因り藍綬褒章に金盃一個副賜候事

明治三十一年三月十一日

賞勳局總裁正三位勳一等子爵　大給恒

◎佛敎主義の婦人會　反省の鏡の其後の報導にすれば左の如き佛敎婦人會あり。

●越中富山眞宗婦人敎會　は同地本願寺別院知堂高岡應順氏の創立にかゝり、同別院內に本部を置く、現在會員六百五十名に達すといふ。

●肥後竹迫婦人敎會　は肥後國菊地郡合志村大字竹迫に在り、同地方有志婦人十四名の發起に成り現在會員百十餘名あり。創立は明治二十年三月なりといふ。

●京都婦人慈善敎會　は京都因幡藥師平等院內に在り、目下會員凡八百名といふ

◎第一回婦人製品博覽會　はいよ〳〵四月十一日より京都博覽會場に於て開かれたり、出品には陶器、木具、寫眞、吳服等の實品、參考品には吳服店の出品、高等女學校、平安女學院をはじめ幾多の裁縫所、小學校女子部にては遊廓女工場の出品もあり。之を要するに婦人の製品は割合に少なくまた引立ぬよし。

◎婦人貯蓄會　備前國邑久郡豐村大字濵に於ては、去二十七年十一月より婦人貯蓄會なるものを創設し、年齡五十歲以下十七歲迄の品行方正の婦女に限り入會を許し、毎月二十一日の夜を會期と定め、會費五十錢宛を出し之を銀行に預入れたるが、本年三月三十一日迄の計算に依れば其金高八百七十三圓二十錢に達したりといふ。而して同會の旨意は總金高千圓に滿つる迄互に出金して夫より右金高の利金を以て、一つの私立裁縫學校を設立し、女子敎育の一進歩を圖る見込なりといふ。

◎愚情　廣島縣八幡の野田某の娘たみなるもの、兄の學資を補はんが爲に五十圓にて身を苦界に沈むと。

◎學校補助會　米國マッサチユセッツ州サンドウイッチにては、此程女子より成立せる學校補助會なるものを設け、毎週一回集合して、學校に於て地理、歷史、國語、文學、理科、技藝等を敎授するに用ゐて有益なるべき圖畫を新聞雜誌其地の出版物より切り拔き、之を臺紙に張り付けて學校に寄贈するを目的とすといふ。

◎婦人夏着の流行品　三井吳服店の流行夏着は左の如し、之を衣裳の正畧に從つて眞草行に分つ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●眞の部

▲松　十六七歳なる令孃向

(上着) 絽縮緬或は紋絽薄淺黄の暈染に摸様さして六玉川或は籬に常夏等なり●(重子) 紅或は紅梅色の絽若しくは紋絽●(長襦袢) 縮緬地白の紅友禪或は緋無地の紋絽●(半襟) 縮緬又は絽或は絽縮緬の白地に有職の葵摸様●(帶) 地質は綴錦或は絽朱珍地色白地に摸様は金通し木隱れの瀧●(帶上げ) 紅の絽縮緬

▲竹　二十歳前後の令孃向

(上着) 縮緬或は絽又は絽明石に染は銀鼠の地落しにて摸様は漣に磯馴松又は柴舟等●(重子) 白絽●(長襦袢) 白の紋絽縮緬●(半襟) 縫入白の縮緬又は絽或は絽縮緬菱又は有職澤瀉摸様●、帶) 厚板或は絽朱珍にして色は白茶地に蛇籠飛衛或は御納戸地に夏楓摸様●(帶上げ) 縮緬の友禪摸様

▲梅　重に夫人向にして三十歳前後

(上着) 地質絽の素鼠にして摸様は白上りの遠干潟に海松又は雪の小笹●(重子) 白絽●(長襦袢) 白の紋絽●(半襟) 白絽●(帶) 厚板或は絽朱珍地にして地色は茶鼠に有職の蝶鳥又は小摸様雪の松●(帶上げ) 白地縮緬の薄淺黄疋田摸様

●行の部

▲松　十六七歳の令孃

(上着) 縮緬又は絽縮緬の朧染●(長襦袢) 縮緬、絽或は絽縮緬の綸羽友仙瀧に紅葉●(半襟) 縮緬又は絽縮緬摸様詰菊●(帶) 紋鹽瀬の友仙染●(帶上ケ) 縮緬の友仙染摸様

▲竹　廿歳前後

(上着) 縮緬又絽若くは絽明石色は御納戸の白目上り或は縞染の靜付き絽明石なれば同店考案の透摸様さし遠見の須磨の浦又は月夜の秋草摸様などなるべし●(長襦袢) 綸羽友仙の絽或は絽縮緬雪月花摸様●(半襟) 淺黄絽縮緬の白拔摸様●(帶)厚板織濃御納戸銀通し洲濱に古代千鳥或は尾花の露●(帶上ケ)白地八橋織

▲梅　三十歳前後

(上着) 地質縮緬又は絽縮緬の縮緬の縞染小紋、染色薄鼠かへし●(長襦袢) 縮緬或は絽縮緬の飛絞り若くは淺黄の傘絞り●(半襟) 縮緬或は絽縮緬の白拔き摸様●(帶)厚板御納戸地に古代鳥唐草摸様●(帶上ケ)紋羽二重の絞り染

●草の部

▲松　十六七歳の令孃向

(上着) 縮緬或は絽の御納戸絣り●(長襦袢) 絹縮の紅入友仙模様●(半襟) 縮緬或は絽縮緬の紅鼠纈入菊摸様●(帶) 朱珍金茶地の鵆羽片側は紅鼠の繻子識●(帶上げ) 紋羽二重紅絞り

▲竹　二十歳前後

(上着) 御召縮緬或は絽の白薩摩筋地色は薄葡萄●(長襦袢) 絹縮友仙暈染松影模様●(半襟) 縮緬或ひは絽縮緬に白の繍入●(帶) 白絽の獻上片側は淸凉織●(帶上け) 御納戸白の手綱染

▲梅　三十歳前後

(上着) 平御召(廣貫織或は司織とも云ふ)松魚縞又は變り小壁●(長襦袢) 銀鼠の紋絽●(半襟) 縮緬或は絽の薄鼠に白拔模様●(帶) 和蘭陀織片側黑朱珍●(帶上け) 薄淺黄の疋田絞り

◎美談一くさり　慈善至孝の靑年鳥取縣八頭郡登米村字富枝大村和七郞男長太郞(鳥取新報四月七日)◎母の龜鑑美作國久米南條郡佐良山村大字一方の人力車夫田淵綱吉の妻ます(因伯時報四月九日)◎德永氏の篤志(長崎新報四月九日)◎學生美談愛媛縣新居郡神戸村大字中野松本竹次郞(愛媛新報四月九日)◎非人志士の恩に酬ふ(中央新聞四月十二日)◎憐むべし孝心の心事高知縣幡多郡下田芳之助長男太郞(高知日報四月八日九日)◎可憐の孝子(德島市助任町本田カメの長男初太郞(德島新報四月八日九日)◎小學生徒の摸範播磨國美方郡村岡日新高等小學校生徒伊藤照治(內外新聞四月十三日)◎軍人の母山形縣東田川郡大和村大字廻館鶴卷善太郞妻きく(奥羽日々新聞四月十四日)◎孝婦佐賀縣杵島郡白石村秀津淵上芳太郞妻よし(佐賀自由四月十四日)◎孝女の鑑岐阜縣羽島郡南宿村近藤善九郞妹タキ(岐阜日新聞四月十四日)◎美談栃木縣安蘇郡三好村大字岩崎岡權藏と其妻ふぢ(下野新聞四月十六日)◎殊勝なる婦人山口縣佐波郡牟禮村字浮野野村平助長女アサ(長周日報四月二十日)◎姉妹の孝子東京市本所區中の鄕竹町二十三番地吉田源太郞娘キヨ及エイ(中央新聞四月十七、十八、十九、二十一日)

◎故瓜生岩子の追弔會　四月十九日故瓜生會長の一週年忌に相當せしを以て税所敦子、下田歌子、土方龜子、田中伊輿子、板垣絹子、三島和歌子、岩佐德子、星綱子、後藤和子、成瀨聽子、山田英津子、高橋淸子、河野關子等の貴婦人發起人となり、時宗管長遊行上人を招請し、淺草芝崎町月輪寺に於て莊嚴なる追弔供養大法會を營み、大內靑巒居士の岩女生前の履歴に就き一場の演說もありて、頗る盛會なりしといふ。

◎女子電話交換手の募集　東京電話交換局にては事業擴張の爲め、四月中旬までに女子交換手を募集したり。而して從來交換手の給料は最高日給二十五錢なりしも、過般四十錢に改正し、且つ交換局は婦人監督者を置き、風儀品行の取締をなし居る由。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●●●●●第二回豫約廣告●●●●●

四六形洋裝全十八册
紙數二萬一千餘頁
定價金參拾圓

羣書類從

塙保己一編纂

訂正再雕刻

第一輯　神祇部　既刊　以下　第二輯　帝王部、(補任部)○第三輯(系譜部、傳部、官職部、律令部)○第四輯(公事部)○第五輯(裝束部、文筆部、消息部)○第六、七、八輯(和歌部)○第九輯(連歌部)○第十輯(物語部、日記部、紀行部)○第十一輯(管絃部、蹴鞠部、鷹部、遊戲部、飲食部)○第十二輯(合戰部)○第十三輯(武家部)○第十四輯(釋家部)○第十五、十六、十七輯(雜部)○外ニ總目錄一册、本年十月完結の豫定

右は曩日豫約者を募りたるに其の數**二千名**の多きに達し尙續々申込有之も既に豫約期限を經過せしゆゑ一時御斷り致し置きたる處右豫約漏れ諸君の御便宜を計り今般第一輯出來に際し左の方法に依り**第二回の豫約に應ずべし**

一　本年五月十五日迄に一時入金のもの　金拾六圓

一　本年五月十五日迄及十月三十日の二回に九圓宛入金のもの　金拾八圓

但し東京市外は別に遞送料を申受く

見本御入用の方は郵券二錢投ぜらるべし

明治三十一年四月

東京市京橋區彌左衛門町七番地
(電話番號本局千二百二十三番)
合名會社　**經濟雜誌社**

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY